文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための対話型アセスメントDLA

多文化多言語の子どもの「ことばの力」をはかる
オンライン・アセスメント マニュアル

令和７年（2025）年４月

文部科学省

目　次

1．はじめに…… 3
Column 「多文化多言語の子ども」とアセスメント …… 7
Column 学習指導要領及び令和の日本型学校教育と「ことばの力」のアセスメント…… 8

2．アセスメント実施前の情報把握
（1）アセスメント実施者及び学校が情報を把握する意味 …… 9
（2）アセスメント・チェックシート …… 10
（3）各項目の情報を把握する意味と記入にあたっての留意事項 …… 12
（4）アセスメントの必要性についての判断 …… 14

3．アセスメント実施の準備
（1）実施に向けた準備の流れ …… 15
（2）申込とチェックシートの送付 …… 15
（3）保護者の同意書 …… 15
（4）実施日時等の連絡調整 …… 17
（5）テキストの入手と選定 …… 17
（6）事前ヒアリング …… 18
（7）テキストの準備 …… 19
（8）実施者の準備 …… 19

4．日本語アセスメント
（1）概要 …… 21
（2）アセスメント開始にあたっての確認 …… 21
（3）アセスメントの流れと留意事項 …… 22

5．母語アセスメント
（1）母語アセスメント実施者への依頼と打ち合わせ …… 26
（2）母語テキストの選定 …… 27
（3）母語テキストによる〈読む〉のアセスメント準備 …… 27
（4）アセスメント終了後の打ち合わせ …… 27
（5）アセスメント・レポートの作成 …… 28

6．アセスメント実施後の流れ……29

7．アセスメント・レポート
（1）子どもの基礎情報の記入について ……31
（2）「『ことばの力のものさし』に照らした○○さんのことばの力」について ……31
（3）「○○さんのことばの力についてのコメント」について……33
（4）「ことばの力を伸ばすために」について……34

8．レポート送付後のフォローアップ
（1）フォローアップ会議 ……39
（2）フォローアップのための相談対応 ……41
Column　トランスランゲージング教育と ICT 活用 ……42

9．参考資料
（1）アセスメント・レポート様式 ……43
（2）同意書多言語版 ……44
（3）準拠資料 ……52

謝辞……53
執筆者・協力者……54

1. はじめに

オンライン・アセスメント マニュアルが想定する読者

このマニュアルは、多文化多言語の子どもの「ことばの力」をはかるアセスメントを、オンラインで実施する方法についてわかりやすく示したものです。

学校現場にいる子どもとオンライン上で対話しながら「子どものことばの力」をアセスメントしようとする人や、それをコーディネートする人は、マニュアル全体に目を通してください。学校の先生方は、アセスメントに向けた学校側の準備や、アセスメント結果を活かした効果的な指導のためのフォローアップ等に関する部分を中心にお読みいただくとよいでしょう。また、オンライン・アセスメントがどのように行われるのか知りたいという保護者の方にもお読みいただけます。

オンライン・アセスメント マニュアルが準拠するもの

アセスメントの内容については、文部科学省『文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための対話型アセスメント DLA』(2025)(以下、『改訂版 DLA』)に準拠しています。本マニュアルを活用する際には、アセスメントの基本的な考え方、進め方、素材等について、『改訂版 DLA』を参照していただく必要があります。

また、アセスメントで把握する「子どものことばの力」については、文部科学省『文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための「ことばの発達と習得のものさし」実践ガイド』(2025)(以下、『実践ガイド』)に準拠しています。アセスメントの評価及びフォローアップの段階では、『実践ガイド』を踏まえて、「ことばの発達と習得のものさし」(以下、「ことばの力のものさし」)による評価を行います。

アセスメント実践者やコーディネーターは、アセスメント・レポートの「ことばの力を伸ばすために」や、学習指導についての助言を行うフォローアップ会議において、『実践ガイド』の実践編「第５章　実践記録集」及び資料編「第６章　作文指導の中での書く力の評価」を参照しながら、理論編に示された「ことばの力のものさし」の本質を理解した上で指導の充実に向けた助言を行うことが期待されます。

以上のようにアセスメントの基本となる冊子が別に刊行されているのに、なぜ、オンライン・アセスメントのマニュアルが必要なのでしょうか。理由は２つあります。

なぜ、オンライン・アセスメントが必要なのか　❶散在地域での普及に向けて

ひとつは、アセスメントがまだ学校現場等に十分浸透しておらず、特に多文化多言語の子どもが少ない散在地域ではあまり活用されていない実態があるからです。令和５年度の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」（文部科学省）では、日本語指導が必要かどうかを判断するにあたって「DLA や類似の日本語能力測定により判定している」学校は約２割にとどまっています。背景のひとつに、多文化多言語の子どもが少ない散在地域では、アセスメントを実施した経験のある人材は少なく、実施に向けた条件が整っていないことがあると推測されます。受け入れ経験のない学校にある日突然、日本語を母語としない子どもがやってきたとき、子どもの「ことばの力」をどう測ったらいいのか、どう指導していったらいいのか、学校の先生方も悩まれるのではないでしょうか。オンライン・アセスメントを広めることで、散在地域においても、専門家や熟達者によるアセスメントが適切に行われる環境をつくっていきたいと考えています。

オンラインでアセスメントを行う際には、さまざまな注意が必要です。対面でのアセスメント実施に慣れていても、オンラインでは、技術的・方法的に留意しなければならない点もあります。何より、学校現場を訪れることなく、その後の指導に役立つアセスメントを行うには、事前の情報収集とフォローアップの在り方が問われます。このマニュアルは、そうした点を重視して作成しました。

なぜ、オンライン・アセスメントが必要なのか　❷母語アセスメントの普及に向けて

オンライン・アセスメントを推進するもう一つの理由は、母語アセスメントの普及です。

母語でのアセスメントとなると、それができる人材は全国でも多くはありません。オンラインを使うことによって、集住地域・散在地域問わず、全国のどこでも、母語アセスメントが実施できるようになります。

なぜ、母語アセスメントが重要なのでしょうか？　「ことばの力のものさし」では、母語も含めた思考・判断・表現を支える包括的なことばの力と、日本語固有の力の両方を測るようになっています。多文化多言語の子どものための対話型アセスメントの専門家や熟達者は、日本語だけでアセスメントしても、その子どもが、母語など日本語以外のことばも含めてどれくらい深く思考し判断し、表現できるのかをある程度把握することができます。しかし、慣れていなければ難しい面があるのも事実で、そうした場合、どうしても日本語固有の力に偏った評価になりがちです。

これに対して、子どもの母語でアセスメントをすることができれば、思考・判断・表現を支える包括的なことばの力をより正確に把握することができます。このことは大変重要な意味をもっています。なぜなら、子どもの認知的な発達と教科学習を支えるのは、思考・判断・表現を支える包括的なことばの力だからです。オンラインであれば、さまざまな母語に対応したアセスメントを全国のどこにでも届けることができます。このことも、オンライン・アセスメント マニュアル作成の大きなねらいです。

アセスメントを日常の指導に活かし、保護者との関係構築の基盤とするために…

本マニュアルは、アセスメントの結果をどのように伝え、学校での日常の指導につなげていくか、さらに結果を保護者にどう届けていくかを重視して作成されています。

アセスメントは、日常の指導につなげてこそ意味があります。本マニュアルでは、事前のチェックシートでアセスメント実施の必要性を判断し、実施する場合には、子どもを日常的に指導する教師や支援員を対象に短時間の事前ヒアリングをした上で、１授業時間内（日本語、母語はそれぞれ１授業時間）でアセスメントを行います。さらに実施後は、アセスメント・レポートを学校に送付するだけでなく、今後の指導に生かすために、アセスメント実施者と学校がオンラインでフォローアップ会議を開くことを推奨し、その方法を示しています。

また、評価結果を伝えるためのアセスメント・レポートの様式には、保護者に向けたコメントやアドバイスを記載する欄を設けました。

子どものことばの力は、家庭と学校、両方の言語環境・学習環境に支えられて伸びていきます。しかし、学校の先生方と保護者の間で子どものことばの発達について共通理解をはかる機会は、これまでとても限られていたのではないでしょうか。家庭での言語環境や、保護者が子どものことばについてどのような教育方針をもっているのかを学校が把握できていなかったり、教科学習言語能力も含めた子どものことばの発達について保護者がとらえきれずに悩んでいたりすることが少なくないと考えられます。意識的にバイリンガル教育を実践している保護者であっても、実際に子どもの中でことばがどう育っているのか、不安を感じていることも少なくないでしょう。特に、日本語を母語としない保護者は、学校との意思疎通に困難を感じ、子どものことばの現状をつかめないでいる可能性が高いと考えられます。

そうした保護者にとって、子どものことばの力の現状を伝え、複数言語環境を肯定的にとらえつつ、今後に向けて家庭でできる支援や配慮を助言するアセスメント・レポートは、とても参考になるでしょう。そして、学校の先生方にとっても、子どもの家庭での言語環境にも目配りした上で、学校での適切な教育支援を考える基盤となると考えられます。

アセスメント・レポートをはさんで、保護者と学校が子どものことばの発達と習得について共通の理解を持つことによって、子どもは複数言語環境で生きる自分自身の状況を肯定的に受け止めながら、両方から適切な教育支援を受けることができるでしょう。

アセスメントはテストではありません。ぜひ、多文化多言語の子どもの学習指導の充実のために、また、複数言語環境で生活する保護者との関係構築の基盤となる情報として、活かしていってください。

散在地域でオンライン・アセスメントを進めるためのチーム構築とコーディネーター

オンライン・アセスメントを効果的に行うためには、コーディネーター的な役割を果たす人材や機関が重要になってきます。

コーディネーターは、次のような要件を満たすことが望ましいといえます。

①『改訂版 DLA』及び「ことばの力のものさし」について熟知している。

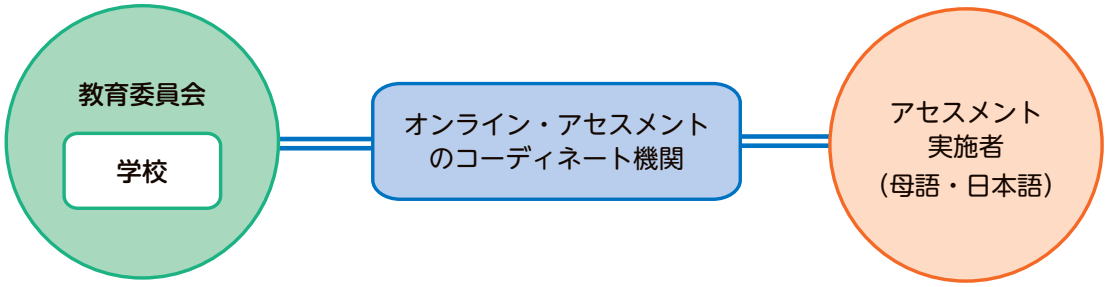
②散在地域の学校の実態をよく知っている。

③日本語や母語でアセスメントができる人材ネットワークをもっている。

④学校の先生方と連携して、事前ヒアリングから、事後のフォローアップ会議や相談までの一連の流れをコーディネートできる。

コーディネーターを務める人材や機関は、学校の先生方･教育委員会･アセスメント実施者がチームとして機能できるように、チーム構築を意識しながらアセスメントを進めていきましょう。

オンラインであれば、都道府県単位ではなく、散在地域全体を視野に入れたコーディネートも可能でしょう。これまで、多文化多言語の子どもの教育支援及びその調査研究は、集住地域を中心に進んできました。しかし、散在地域には、集住地域とは異なる条件や課題があります。今後は、散在地域の教育委員会や支援者同士が積極的に情報交換する機会を設け、最新の情報をキャッチアップしつつ、散在地域にあった支援のしくみを構築していく必要があるといえます。その中で、アセスメントについても、都道府県を超え、散在地域全体に対してオンライン･アセスメントのコーディネートができる体制を徐々に構築していくことが期待されます。



オンライン・アセスメント実施システム(例)

本マニュアルの構成

本マニュアルは、次のようなアセスメント実施の流れに沿って構成されています。

Column 「多文化多言語の子ども」とアセスメント

「多文化多言語の子ども」とは、多文化共生政策を推進するカナダにおいて、母語・継承語・第二言語など複数言語環境で育つ子どもの教育を研究したカミンズらが用いた“Culturally and Linguistically Diverse Children”（カミンズ・中島 2021 など）を訳し、端的に表現したことばです。

これまでは、「日本語指導が必要な児童生徒」という表現がよく使われてきました。この表現は、日本語指導の必要性を伝えている点で大切ですが、ことばを受け取る側が、当該の子どもを「日本語ができない存在」としてのみ把握することにつながってしまえば大きな問題をはらむことになります。子どもの持つ複数言語や文化的背景は見過ごされてしまい、その子どもの思考・判断・表現を支える包括的なことばの力が学習指導に活かされず、教室に多様性をもたらすはずの子どもの文化的な背景も見えなくなってしまうからです。そこで、本マニュアルでは、子どものもつ複数の言語や文化背景をより中立的・肯定的にとらえ、多文化共生の学校づくりの観点から望ましい表現として、「多文化多言語の子ども」を使っています。

大人と違って、子どもがことばを習得する過程は、新たな概念を理解し複雑な思考ができるようになる認知的な発達と不可分です。複数言語環境を生きる子どもの教育に関する研究では、子どものことばの力を伸ばすためには、「新たに習得を目指す言語だけでなく、母語も含めたすべての言語資源を活用した時にできること、まだできないこと、教師の適切な支援があればできることを見極めること」が重要だと言われています（ガルシアほか、2024）。子どもの学びの保障をするということは、思考・判断・表現を支える包括的なことばの力を伸ばすことにほかなりません。表面にみえる日本語の力はまだ十分でない場合でも、母語では複雑な概念を捉え思考することができる子どももいれば、母語でも日本語でもまだそうした概念を獲得できていない子どももいます。表面的な日本語の力は同じであっても、それぞれの子どもへの指導の在り方は異なったものになるでしょう。適切な指導のためには、子どもの中で包括的なことばの力がどう育っているのかをアセスメントすることがとても重要なのです。

ジム・カミンズ、中島和子、2021、『言語マイノリティを支える教育【新装版】』明石書店
ガルシアほか、2024、『トランスランゲージング・クラスルーム―子どもたちの複数言語を活用した学校教師の実践』、明石書店

Column　学習指導要領及び令和の日本型学校教育と「ことばの力」のアセスメント

多文化多言語の子どもが増える中、どのように学びを保障するのかが、日本社会の大きな課題になっています。

学習指導要領及びその解説には、外国につながる子どもがもつ「異文化での貴重な生活経験」とそれを通じて身に付けた「見方や考え方、感情や情緒、外国語の能力などの特性を、本人の各教科等の学習に活かすことができるよう配慮」し、当該の子どもが「自信や誇りをもって学校生活において自己実現を図ることができるよう」にすることや、周囲の子どもについても、外国につながる子どもと「共に学ぶことを通じて、互いの長所や特性を認め、広い視野をもって異文化を理解し共に生きていこうとする姿勢を育てるように配慮」することが記されています。そして、「日本語の習得に困難のある」場合は「実態に応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行う」とした上で、「日常的な会話はできていても学習に必要な日本語の能力が十分ではなく、学習活動への参加に支障が生じたりする場合がある」ことを指摘し、学習に取り組むことができるよう「きめ細かな指導を行う」よう学校現場に求めています。

また、令和３年の中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」においては、９つの各論の１つとして「増加する外国人児童生徒等への教育の在り方について」が取り上げられ、学校における日本語指導の体制構築の重要性が提起されました。同答申では、全体を貫く重要なキーワードとして、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が示されています。複数言語環境で育つ子どもへの「個別最適な学び」の保障のためにも、「ことばの力」のアセスメントが欠かせないといえるでしょう。

しかし、残念ながら、令和５～６年度文部科学省委託事業「児童生徒の実態把握のためのネットワーク構築に向けた調査研究」で行われた散在地域４県の調査では、教科学習言語能力が十分でないにもかかわらず支援が必要と認識されていない子どもが少なくないことが示されました（弘前大学教育学部、2025）。多文化多言語の子どもの学力保障のためには、教科学習言語能力に注目した適切なアセスメントの普及が不可欠だといえるでしょう。

弘前大学教育学部、2025、『散在地域における多文化多言語の子どもの教育支援の充実に向けて―散在地域４県における「外国につながる児童生徒の教育支援に関するアンケート調査」報告書』、https://www.edu.hirosaki-u.ac.jp/mext-outsourcing.html

2．アセスメント実施前の情報把握

（1）アセスメント実施者及び学校が情報を把握する意味

アセスメント実施前の段階での情報の把握は、実施者にとって、学校にとって、それぞれ次のような意味があります。

実施者がアセスメントをするために

アセスメント実施者が対象となる子どもをいつも指導している人である場合には、実施者はその子どもについて事前に多くの情報を持っていて、それを前提にアセスメントを行うことができます。しかし、オンライン・アセスメントでは、実施者は、子どもの言語環境や学校での様子などについてまったく情報を持っていません。

そこで、アセスメントに必要な情報を収集することが、まず大切になってきます。そのために、作成したのが、p.10 ～ 11 ページのチェックシートです。このチェックシートを学校に送り、記入してもらうことで基礎的な情報を把握することができます。

学校がアセスメントの必要性を判断したり、適切な指導を行ったりするために

学校の先生方にとって、このチェックシートへの記入は、アセスメントの必要性を判断したり、適切な指導に向けて情報を整理したりする重要な機会になります。

学校現場では、「この子どもはアセスメントの対象にした方がいいだろうか？」と悩むこともあると思います。チェックシートの記入内容から、アセスメントの必要性を判断しましょう。具体的には、p.14 にアセスメントが推奨されるケースについて載せていますので、そちらをお読みください。

また、記入していく中で、「いつ来日したのかがわからない」「家庭内で何語で話しているか知らない」「国籍はどこなんだろう」などのように、把握できていない情報があることに気づく場合もあるでしょう。不明の欄に〇をつける前に、できるだけ、子どもや保護者に確認してみてください。これらの情報は、アセスメントのために必要な情報であると同時に、指導上参考にすべき情報でもあります。把握できていない場合は、これを機会に把握するとよいでしょう。

チェックシートの情報を把握する指導上の意味と把握にあたっての留意事項は、p.12 ～ 13 に掲載しました。チェックシート内の用語がわからない場合にも、そちらを確認してください（「母語」「家庭内使用言語」「やさしい日本語」など）。

（2）アセスメント・チェックシート

記入日　　年　　月　　日

学校名 学校	記入者　職名 氏名	メールアドレス
子ども本人の名前	学　年　（　　）年 年　齢　（　　）歳 性　別　男・女・その他	ア．年齢相当の学年に在籍 イ．年齢相当より下の学年に在籍
親の国籍　母親（　　）・不明 父親（　　）・不明	子ども本人の国籍（　　） 在留資格（　　）	
来日時期 ア．生まれた時から イ．途中で来日（　　歳） ウ．不明	滞日期間 （　　）年 （　　）か月	本人の母語・第二言語等（　　） 母親の母語　（　　） 父親の母語　（　　） 家庭内使用言語（　　）

保護者面談はどうしていますか？

ア．日本人の親が面談に来ている
イ．外国出身の親が来るが支障なく面談できる
ウ．やさしい日本語で面談している
エ．通訳してくれる人が一緒に来ている
オ．学校や教育委員会が通訳を入れている
カ．その他（　　）

学校から保護者への通知はどうしていますか？

ア．特に配慮をしなくても、読んでもらえる
イ．通知にルビを振ったり、やさしい日本語にしたりして、渡している
ウ．翻訳版をつくって、渡している
エ．子どもに保護者に説明するように言って、渡している
オ．その他（　　）

子ども本人は、生活に必要な日本語を含むやり取りはどの程度できますか？（複数回答可）

ア．日本語でのやりとりはほとんどできない
イ．日本語で返事やあいさつ程度のやりとりができる
ウ．一語文・二語文程度の日本語でやりとりができる
エ．友達と遊ぶ場面で、日本語を使って意思疎通ができる
オ．学級全体で活動する際、周りの助けなしに教員の指示を聞き取って行動できる
カ．困ったときに、先生や友達に自分の状況を日本語で伝えることができる
キ．その他（　　）

子ども本人は、日本語の読み書きのうち、読むことはどの程度できますか？

ア．読むことはほとんどできない
イ．ひらがな・カタカナで書かれた語句を読み、意味をとらえることができる
ウ．挿絵などが入った物語を、文脈をとらえながら読むことができる
エ．支援（ルビふりや言い換え等）があれば、当該学年の教科書の文章の大意をつかむことができる
オ．支援なしで、当該学年の教科書の文章の大意をつかむことができる

<table>
<tr><td colspan="3">子ども本人は、日本語の読み書きのうち、書くことはどの程度できますか？（複数回答可）
ア．書くことはほとんどできない
イ．ひらがな、カタカナは何とか書けるが、まだ間違いがある
ウ．一、二文程度のやさしい短文を書くことができる
エ．日記程度の簡単な文章を、ある程度まとまった長さで書くことができる
オ．学年相当のレベルで書くことができる</td></tr>
<tr><td colspan="3">子ども本人の、当該学年の教科の学習状況はどうですか？（複数回答可）
ア．学習内容はほとんど理解できない
イ．視覚的な情報や体験を伴う内容は理解できる
ウ．わからない教科の用語（例えば「分母」など）を説明すれば、理解できることがある
エ．だいたい理解できているようだが、思考したり判断したりすることは難しい
オ．学習内容を理解して、思考したり判断したりすることができる</td></tr>
<tr><td colspan="3">子ども本人への指導や家庭との連携において課題等があれば、記入してください。また、上記の設問で回答に迷う点があった場合なども、具体的な状況をお書きください。</td></tr>
<tr><td>この子どもの日本語指導や学習指導のために、支援者などが入っていますか？
ア．はい　　イ．いいえ

⇒アの場合、右へ</td><td>▶週（　　）時間程度
▶支援者（複数回答可）
ア．日本語指導担当教員
イ．日本語支援員
ウ．特別支援教育支援員
エ．教頭や教務主任など
オ．その他（　　）</td><td>▶支援形態（複数回答可）
ア．国際教室や日本語教室
イ．主にア以外の取り出し
ウ．主に入り込み
エ．取り出し、入り込み半々
オ．特別支援学級や通級等
カ．その他（　　）</td></tr>
<tr><td>今後の滞日予定
ア．日本在住予定
イ．帰国予定
ウ．その他（　　）
エ．不　明</td><td colspan="2">【中学生・高校生のみ回答】卒業後の進路希望
ア．進　学（　　）
イ．就　職
ウ．その他（　　）
エ．不　明</td></tr>
<tr><td>アセスメント希望時期</td><td colspan="2">（　　）</td></tr>
</table>

チェックシートは、文部科学省のホームページ及び弘前大学の文部科学省委託事業のホームページからダウンロードすることができます。

URL　https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm
　　https://www.edu.hirosaki-u.ac.jp/mext-outsourcing.html

各項目の情報を把握する意味や記入上の注意は、p.12 ～ 13 をご覧ください。

（3）各項目の情報を把握する意味と記入にあたっての留意事項

記入者の職名・氏名	当該の子どもの学習状況などをよくわかっている人が記入します。担任や、取り出しの指導を担当している教員・支援員等が想定されます。基本的には、記入者が、アセスメント実施にあたっての事前ヒアリング（p.18）の対象者となります。
メールアドレス	オンライン実施にあたって、その後も使用するメールアドレスを記入します。日程調整のやりとりだけでなく、会議への接続 URL などが送信されます。
在籍学年と年齢の関係	思考・判断・表現を支える「ことばの力」は、年齢によって発達段階が異なります。2025 年に新たに開発された「ことばの力のものさし」では、年齢も考慮してステージをとらえるようになっています。
国籍・在留資格	国籍や在留資格は、多文化共生の学校づくりに向けた教育実践や、キャリア支援を進める上で重要な情報です。なお、外国籍のみの場合は、指導要録に在留カードに記された表記で本名を記載する必要があります。校内での通名がある場合は（　　）書きで表記します。国籍や本名が把握できていない場合は速やかに把握しましょう。
来日時期 (来日年齢・滞日期間)	子どものことばの力をとらえる上で、もっとも重要な情報です。母語で思考力・判断力・表現力がどの程度ある状態で日本語の世界に入ったか、母語が保持できているか、日本語の自然習得がどの程度期待できるか、などを判断する際に役立ちます。
母語 家庭内使用言語	本マニュアルにおいて、母語とは、幼少期に周囲の大人が話すのを聞いて最初に身につけた言語を指します（母国語が母語とは限りません）。母語は、子どもの発達を根底から支えています。また、国や地域によっては、母語ではない第二・第三言語で学校教育を受けている場合もあります。その場合には、認知的な発達をこれらの言語が支えている可能性があります。 家庭でどの言語を使っているかは、子どもの言語環境を把握する上で非常に重要な情報です。家族によっては、母語・継承語（子ども自身にとっては第一言語ではないが、親が使う言語）の維持に熱心であったり、バイリンガル教育を意識的に行っていたりすることもあります。
保護者面談及び通知の状況 やさしい日本語	保護者面談及び通知の状況は、保護者の言語使用状況を把握するのに役立ちます。また、保護者の同意書や、アセスメント・レポートの保護者宛の欄に、多言語対応が必要かどうか、判断する際の参考になります。 「やさしい日本語」とは、一文を短くしたり、文の構造を簡単にしたり、日常的によく使われる語彙に置きかえたりして、日本語が母語でない人にもわかりやすくした日本語のことです。

生活に必要な 日本語のやり取り	６段階の選択肢であてはまるものすべてに〇をつけます。このうち、オ・カの両方に〇がついている場合は、「話す・聞く」については問題ないと考えられます。それ以外の場合は、アセスメントの必要が高いといえます。
読むこと	５段階の選択肢であてはまるものすべてに〇をつけます。このうち、オに〇がついている場合は、「読む」についてはほぼ問題ないと判断できます。それ以外の場合は、アセスメントの必要性が高いといえます。「読む」力は、子どもの教科学習言語能力を測る上で、非常に重要な情報となります。
書くこと	５段階の選択肢であてはまるものすべてに〇をつけます。このうち、オに〇がついている場合は、「書く」についてはほぼ問題ないと判断できます。それ以外の場合は、アセスメントの必要性が高いといえます。子どものことばの力は、多くの場合、「聞く⇒話す⇒読む⇒書く」の順で伸びていくため、「聞く・話す」「読む」と比べて、下の段階になることが多い項目です。
教科の学習状況	子どものことばの力を把握するにあたって、生活言語能力と教科学習言語能力に分けてとらえることが重要です。生活言語能力は自然習得できる部分も大きく、１～２年でかなり伸ばすことができます。しかし、教科学習言語能力は、意識的な学習や指導によって伸ばす必要があり、習得には５～７年かかるといわれています。滞日年数が長く、流ちょうに話すことができても、教科学習言語能力に課題を抱え、教科の学習で思考・判断・表現することが難しい場合もあります。学力保障のために重要な項目です。
子ども本人への指導や家庭との連携における課題	学校が困っている点などを記入します。アセスメント実施者は、その内容を意識してアセスメントを行い、アセスメント・レポート等での助言に活かします。
支援状況 （支援時間数・ 支援者・支援形態）	アセスメントは、子どもの現在のことばの力をとらえるためだけでなく、どのような指導を行っていくとよいかを判断するために行います。どのような支援が行われているかを把握した上でアセスメント・レポートやフォローアップ会議での助言を行うために、重要な情報となります。
滞日予定、 進路希望	今後も日本に滞在する予定なのか、短期で帰国するのかによっても、指導の目標が変わってくる可能性があります。また、中学生・高校生は、指導にあたってキャリア支援の観点も欠かせません。いずれも、アセスメント・レポートやフォローアップ会議での助言にあたって重要な情報となります。
アセスメント 希望時期	アセスメントの希望時期を記入しましょう。ただし、実施者との調整があるので、ある程度幅をもって記入するようにしましょう。

（4）アセスメントの必要性についての判断

アセスメント・チェックシートの情報を記入することで、学校としてアセスメントの必要性を判断することができます。

次の項目のいずれかひとつでもあてはまるケースでは、アセスメントの実施を推奨します。なお、それ以外の場合であっても、学校で指導に課題を感じている場合には、アセスメントを希望することをお勧めします。

●「生活に必要な日本語のやり取り」で、オ及びカに○がつかない。
●「読むこと」で、オに○がつかない。
●「書くこと」で、オに○がつかない。

子どものことばの力を見取るにあたっては、生活言語能力と教科学習言語能力の違いに敏感になる必要があります。長く日本で生活し、友達と話したり遊んだりする場面では日本語でコミュニケーションをとることができていたとしても、教科を学ぶのに必要なことばの力を伸ばすことができないでいる子どもたちは少なくありません。アセスメントでは、思考・判断・表現を支える包括的なことばの力について測ることができます。子どもの学力を保障するために、ぜひ、アセスメントを行いましょう。

以下のケースでは、特に母語でのアセスメントを推奨します。

日本語のアセスメントに加えて母語アセスメントを実施することもできますし、滞日期間がごく短いために日本語での応答がほとんど難しい場合や、語彙力チェックで 20 ～ 30%以下が想定される場合などには、母語アセスメントのみを実施することもできます。母語アセスメントで思考・判断・表現を支える包括的なことばの力を把握することで、今後の指導に活かしていきましょう。

●日本語で「聞く・話す」の力が弱く、本人の考えていることを十分把握できない。
●日本語で「読む」「書く」の力が弱く、教科学習に支障がある。
●家庭で、母語など日本語以外の言語の使用が多い。
●母語でのリテラシーの方が日本語のリテラシーよりかなり高い可能性がある。

オンライン、ここがポイント！！

現地の学校に行くことなくアセスメントを行うオンライン実施では、事前の情報収集が何より大切になります。チェックシートと、次の章で示す事前ヒアリングで得られる情報が、アセスメントの質を左右します。しっかり確認しましょう。

3．アセスメント実施の準備

（1）実施に向けた準備の流れ

コーディネーター・アセスメント実施者	学　　校
	チェックシートの記入
受付連絡　保護者同意書の送付	申込 保護者に同意書の記入を依頼し、提出
事前ヒアリング及びアセスメント日程調整 〈読む〉のテキストの入手方法・選定について 連絡	事前ヒアリング及びアセスメント日程調整 〈読む〉のテキストの入手と選定 実施場所・機材の準備
事前ヒアリングの実施（オンライン）	事前ヒアリングの実施（オンライン）
アセスメント実施準備 　語彙・絵カード等の画面共有の準備 　実施時の進行メモデータ等作成	レベル別テキストの準備 実施場所・機材の準備、同席者の確認
アセスメント実施	アセスメント実施

（2）申込とチェックシートの送付　学校

アセスメントを実施することを決めたら、学校は、アセスメント実施者に、アセスメント･チェックシートを添えて、申込をします。個人情報となりますので、送付にあたっては、文書にパスワードをかけるなどの配慮をします。

（3）保護者の同意書　学校　保護者　コーディネーター・アセスメント実施者

コーディネーターまたはアセスメント実施者が定める同意書（p.16）を､学校から保護者に送り、記入を依頼します。チェックシートの記述から翻訳版が必要と判断される場合は、日本語版に加えて翻訳版（p.44 ～ 51）も学校に送ります。同意書の記入は、紙媒体でもオンライン上でも可能にするとよいでしょう。

同意書　　青の部分のみ記入・チェックしてもらいます。

子どもの「ことばの力」をはかるアセスメント　同意書（オンライン版）

　　年　　月　　日

お名前

◆以下の説明を読んで、内容に同意する場合には、説明の最後にある「□はい」にチェックをいれてください。

1．目的について

(1)　このアセスメントは、子どもが、自分自身が持っているすべてのことばを使って「何ができるか」ということを、オンラインの対話を通じて多角的かつ多面的に把握することを目的としています。

(2)　そして、得られた情報をその後の学習の指導・支援に役立てることを目的としています。

2．アセスメントの内容について

(1)　実施するのはDLA（Dialogic Language Assessment for Culturally and Linguistically Diverse Children）というアセスメントです。

(2)　アセスメントは、専門的訓練を受けた日本語指導の専門家が行います。

(3)　アセスメントは、オンライン上で子どもと実施者が1対1の状態で行います。

(4)　内容は、導入会話（約5分）、語彙力（約5分）、話す・聞く力（約8分）、読む力（約25分）の計 45 分～50 分程度になります。

3．守秘義務について

(1)　プライバシーには十分配慮を行うため、アセスメントを受けることで、不利益が及ぶことは一切ありません。

(2)　アセスメントで得られた結果は、実施者と子どもが所属する学校関係者以外に知られることはありません。

4．アセスメント結果の報告について

(1)　アセスメントの結果は、「アセスメント・レポート」としてA4一枚程度にまとめ、お渡しします。

上記アセスメントの実施にあたり、アセスメントの目的・内容・個人情報の取り扱い等について理解した上で、同意しますか？　（どちらかにチェックを入れてください）

□　はい
□　いいえ

多言語版は、巻末資料に掲載しています。また、様式データは、文部科学省及び弘前大学文部科学省委託事業「児童生徒の実態把握のためのネットワーク構築に向けた調査研究」のホームページからダウンロードできます。

URL　https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm
　　https://www.edu.hirosaki-u.ac.jp/mext-outsourcing.html

（4）実施日時等の連絡調整　学校　コーディネーター・アセスメント実施者

コーディネーターまたはアセスメント実施者は、学校との間で、事前ヒアリングとアセスメントのそれぞれの実施日時について調整します。

事前ヒアリングは、15 分程度です。アセスメント実施の２～３日前までに、チェックシート記入者（対象となる子どもの学習状況をよく知る担任または支援員など）を対象に、コーディネーターやアセスメント実施者が行います。アセスメント当日の機材や接続の確認の意味もあるので、学校側の場所や機材はアセスメント当日とできるだけ同じにしましょう。

アセスメントは、日本語アセスメントも母語アセスメントも、それぞれ１授業時間で実施します。どの授業時間なら実施できるか、オンライン実施の場所や機材の準備が可能か、教員または支援員が付き添えるか、など学校側の条件と、実施者が対応できる日程をすり合わせて設定しましょう。

日程が決まったら、実施者は、事前ヒアリング及びアセスメントの Web 会議を設定し、接続のために必要な会議の URL や ID・パスワード等をメールで学校に送ります。

（5）テキストの入手と選定　コーディネーター・アセスメント実施者　学校

事前ヒアリングの日程が決まったら、コーディネーターまたはアセスメント実施者は、対象となる子どもの学年や年齢を参考に〈読む〉のテキスト一式（一番やさしいものから、子どもの年齢・学年相当のテキストまで）とその入手方法を学校に伝え、その中から対象となる子どもが読めそうなテキストを３つ程度選んでおいてもらうよう依頼します。学校は当該のテキストを入手し、事前ヒアリングに対応する担任や支援員がテキスト一式に目を通し、読めそうなものを３つ選んでおきます。

「DLA〈読む〉レベル別テキスト」の入手方法：国際教育課担当宛に、（１）送り先（ご住所・お宛名）、（２）使用場所（学校名等）、（３）使用目的をメールに記載して申請します。
　国際教育課担当メールアドレス：nihongo-shidou@mext.go.jp
詳細については次の文部科学省ホームページを参照してください。
　https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm

オンライン、ここがポイント！！

オンライン・アセスメントでは、さまざまな連絡がメールで行われ、さらに同意書やアセスメント・レポートなどがメール添付で送られることになります。学校のオンライン環境は、地域によって違いがあります。学校代表のメールアドレスのみの自治体もあれば、個々の教員にメールアドレスが割り振られている自治体もあります。チェックシートに記入されたメールアドレスが基本になりますが、有効かどうかよく確認しましょう。学校現場では、あまりメールの受信を確認する習慣がない場合もありますし、メールに添付できるデータの容量が少ない場合もあります。データ量の多い添付ファイルがある場合などは、確実に届いているか、別メールで確認したり電話をしたりしたほうがよいかもしれません。メール添付が難しい場合、クラウドで受け渡したり、ファイル転送サービスを使ったりするなどの工夫が必要です。学校側がクラウドやファイル転送サービスなどを使い慣れていない場合は、ダウンロードの方法をメール本文で丁寧に伝えたりするようにしましょう。

（6）事前ヒアリング　コーディネーター・アセスメント実施者　学校

以下は、事前ヒアリングを行うコーディネーターまたはアセスメント実施者の視点から記述します。

①冒頭で録画の許可を得ます。ヒアリング時間は 15 分程度であると伝えます。

②アセスメントに向けた技術的な確認と依頼を行います。

1）実施時間の詳細を確認します。学校側は「○時間目」と表現することもありますが、学校によって時程は異なるので、「○：○○～○：○○」のように細かく確認しましょう。

2）実施場所・機材の確認をします。アセスメント当日と同じ場所や機材でない場合は、当日の接続や機材について丁寧に打ち合わせます。

3）Web会議の画面上の操作で、学校側の画面に、アセスメント実施者だけが大きく映るよう、当日付き添う教員に、Web 会議の「ピン留め機能」について確認し、実際に操作してもらいましょう。アセスメント当日も実施者が大きく映る画面構成にしてもらうよう依頼します。

③チェックシートの記入内容を踏まえて、子どもの状況について具体的に確認します。

1）子ども及び保護者の状況を確認します。特に、次の内容は大切です。

・本人の名前について、アセスメントでの呼び方を確認します（リラックスできるよう日頃呼ばれ慣れている名前やニックネームを使う方向で聞き取るとよいでしょう）。

・来日時期・滞日期間を確認します（母国や他国と日本を何度か行き来している場合もあります）。

・家庭での使用言語については、子ども→親　親→子ども　きょうだい間に分けて聞いておきます。

・本人が母語を話せるか、読み書きできるかなどを聞きとります。

2）「生活でのやり取り」「読むこと」「書くこと」「教科の学習状況」について具体的な様子を聞き取ります。その際、「ことばの力のものさし」のどのステージやステップにあたるのか、意識しながら聞くとよいでしょう。

3）アセスメント当日、子どもが安心できるように配慮するため、普段の様子や性格（恥ずかしがりや、緊張しやすい、活発に話す、など）について聞き取っておきましょう。

4）指導にあたっている教員や支援員が指導上困っている点や悩んでいる点に関わる情報を、できるだけ具体的に聞き取ります。アセスメントの中でそれらを意識して子どものことばの力を把握することができますし、アセスメント・レポートへの助言等にも活かすことができるでしょう。

5）指導にあたっている教員や支援員が読めそうだと判断したテキストレベルを確認します。ただし、漢字や音読ができるかどうかだけで判断するのではなく、最後まで読んで内容理解ができるかという点で判断してもらうことが重要です。事前ヒアリングの中でその点をきちんと伝えて改めて相談し、最終的に準備する２～３つのテキストを決定します。子どもが読める可能性のある上限レベルのテキストと、その下のレベルのテキストを選びます。

相談する上で、どの学年のテキストなら読んで理解できているのかを聞くことも、参考になるでしょう。テキスト選択については、『改訂版 DLA』の p.22 ～ 24 をよく読んでください。

④決定した２～３つのテキストについて、当日までに、子どもが手元において見ることができるよう学校に準備を依頼します。

⑤お礼を言って、アセスメントの日時を再確認して、終了します。

（7）テキストの準備　学校

事前ヒアリングで選定した２～３つのテキストを準備し、当日、アセスメントを受ける子どもの手元に置けるよう準備します。アセスメントの中で、読んだテキストを閉じるよう指示される場合があります。その場合は、印刷面を下にして伏せるなど、文字が見えない状態をつくれるようにします。

（8）実施者の準備　アセスメント実施者

アセスメント実施者は、アセスメントに備えて次の準備を行います。

①アセスメント・チェックシート及び事前ヒアリング動画に目を通しておきます（コーディネーターが入る場合は、これらのチェックシートや動画をアセスメント実施者に送ります）。

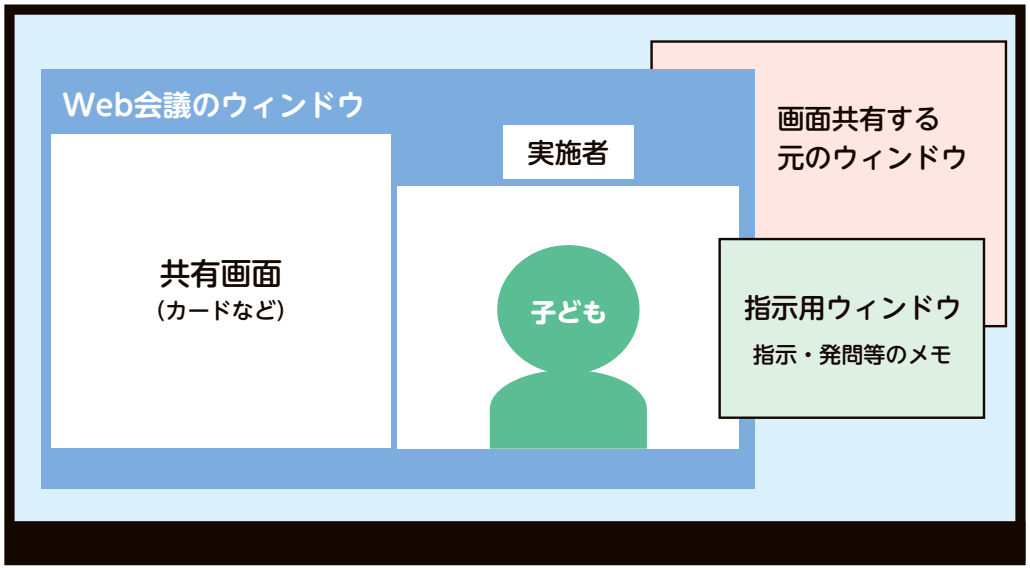
②事前情報を踏まえて、進行の時間配分や、〈読む〉で掘り下げていく質問等を検討しておきます。

③語彙カード、〈聞く・話す〉の絵カードをアセスメントの中で円滑に画面表示できるよう、準備します。

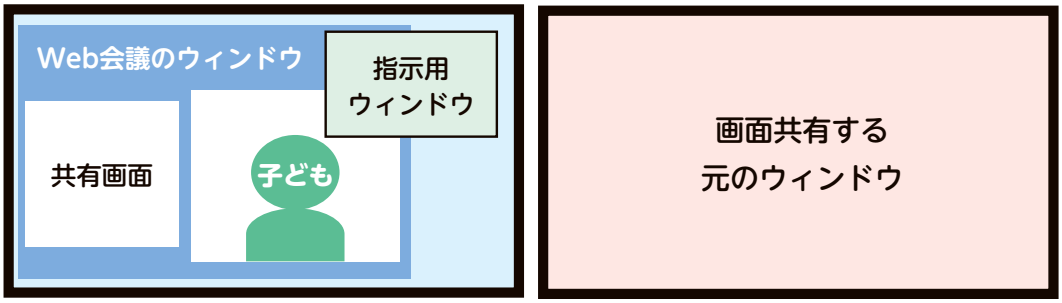
④アセスメント当日はマニュアルや資料等が手元にあるとそちらに目線が行ってしまい、子どもから見たとき、目線が合わない状態になってしまいがちです。できれば、事前に想定される指示や発問等を簡単に確認できるスライド等を作っておき、オンライン画面上の子どもの顔の横などに、小さなサイズの別ウィンドウで表示できるよう用意しておくとよいでしょう。目線の移動を少なくして、子どもと目線を合わせながら、資料も同時に確認できる状態になります。可能であれば、ダブルモニターを準備しておくと、より多くの情報を表示した状態にしておけるので、便利です。

オンライン、ここがポイント！！

アセスメントは日常の指導につながってこそ、意味があります。学校を訪ねることなく実施するオンライン・アセスメントでは、ふだん子どもを指導している教員や支援員が、指導上どのような課題を感じているかを、あらかじめしっかり把握しておくことが大切です。事前ヒアリングの中で、子どもの普段の様子、授業内での様子、対応している教員や支援員の悩みや困り感などを把握することで、アセスメントの中で確認すべきポイントが見えてきます。アセスメントから明らかになったことを踏まえて、アセスメント・レポートやフォローアップ会議で、教員や支援員の感じている課題に対して、適切に助言できるようにしましょう。



実施者側の PC 画面例①



実施者側の PC 画面例②（ダブルモニター）

オンライン、ここがポイント！！

オンライン・アセスメントでは、PC 画面上に何をどのように表示しておくかが大切です。PC 上で、同時に Web 会議、PDF、スライドなどの複数のアプリケーションを開くとそれぞれ別のウィンドウで表示されますが、ウィンドウの大きさや位置は調整可能です。それぞれの大きさや位置を調整して、複数のウィンドウを画面上で同時に見られるようにしておくとよいでしょう。Web 会議のウィンドウの中でも、共有画面部分と参加者の映る部分のサイズを変更することもできるので、その調整をするのもよいでしょう。さらに、1 台の PC に 2 つのモニターをつないでおくと、より広いスペースに複数のウィンドウを並べたり、画面共有の範囲を切り替えたりしやすくなります。

4．日本語アセスメント

アセスメントを限られた時間内にオンラインで行うためには、工夫が必要です。『改訂版 DLA』を参照しながら、次のように実施していきましょう。

１授業時間以内に実施します。１授業時間は、小学校は 45 分、中学校・高等学校は 50 分が一般的ですが、自治体によって特徴ある展開がなされていたり、行事が入って短縮されたりすることもあります。学校に１授業時間が何分なのかを確認して、準備しましょう。事前に学校と約束した時間内で収まるように進めます。

オンライン・アセスメントは、機材の管理面もあるため、子どもの横に教員や支援員がついているかたちで実施しますが、基本的に教員や支援員は発言せず、子どもとアセスメント実施者のみで応答しながら進めていきます。

（１）概要

『改訂版 DLA』の次の部分を、１授業時間で実施します。限られた時間で、特に最後の〈読む〉の部分に十分時間を配分する必要があるので、要領よく進めるようにしましょう。時間はあくまで目安です。特にレベルの高い子どもについては〈読む〉に十分な時間を配分するようにしましょう。レベルの高い子どもについては、〈聞く・話す〉まではさらっと進めて、〈読む〉で 30 分以上取ってもよいでしょう。

内　　容		目安の時間
〈はじめの一歩〉	導入会話	3～5分
	語彙力チェック	5分
〈聞く・話す〉		7～8分
〈読む〉		25 分
		計　小学校 45 分 中学・高校 50 分

いずれも、アセスメントの内容は、『改訂版 DLA』に準拠して進めます。以下の内容については、『改訂版 DLA』の冊子を参照しながら読んでください。

（２）アセスメント開始にあたっての確認

円滑にアセスメントを始めるために、機材の準備等は休み時間のうちに完了しておきます。学校側の画面でアセスメント実施者が大きく映っているか、アセスメント実施者の声がしっかり届いているか、学校側の音声がアセスメント実施者にしっかり聞こえているか、を確認します。〈はじめの一歩〉の語彙カード、〈聞く・話す〉の絵カード等の PDF は、いずれもすぐに画面共有できるよう、画面上に開いて準備しておきます。また、実施者用のメモやスライドなどを画面上に表示しておきたい場合も、開いて準備しておきます。

自己紹介などで示せるように、大きく書いた実施者の名札（ふりがな）などを用意しておいても

よいでしょう。ただし、名札等を画面上で見えるようにするには、下の「オンライン、ここがポイント！!」に示した調整が必要かもしれません。確認しておきましょう。

子どもが画面に写ったら、すぐに録画の許可を得て録画を開始します。

あらかじめ確認しておいた名前で呼びかけ、笑顔で挨拶します。実施者は、親しみを込めて自己紹介し、画面上でこちらの顔がしっかりと見えているか、確認します。

これから始めるアセスメントはテストではないことを伝え、子どもが自信をもって、また、リラックスして取り組めるよう、「適切にほめる」ことを意識して進めましょう（事実を踏まえないほめ方や、大げさなほめことばを連発するようなことは避けましょう）。アセスメントが終わった段階で、子どもが「楽しかった」と思えるような進行が望ましいと言えます。特に、画面上で初めて会う人と話すオンライン・アセスメントでは、対面より、子どもは緊張しやすかったり、馴染みにくかったりします。対面のアセスメント以上に、リラックスさせる声かけや、適切なほめことばが重要になってきます。

（3）アセスメントの流れと留意事項

①〈はじめの一歩〉（導入会話・語彙力チェック）

『改訂版 DLA』 p.9 ～ 16 参照

オンラインで子どもの緊張をほぐすには、導入会話の段階から、子どもを安心させたり、自己肯定感を高めたりすることを、特に意識する必要があります。導入会話の段階でどれだけリラックスさせられるかが大変重要です。そのためには、次のような工夫が考えられます。

・子どもの応答に対して、温かい雰囲気で「（話してくれて）よくわかりました」と伝える。
・親子でどの言語で話しているかを質問したり、母語での読み書きについて尋ねたりしますが、その際、複数の言語を使用している場合は、「２つのことばで話せるんですね、素敵ですね」、「○語でも読んだり、書いたりできるんですね。すごいですね」など、積極的に評価する。

語彙力チェックからは、画面共有機能を使うことになります。語彙カードの PDF を画面共有します。必ず、共有した画面が見えているかを確認して、開始します。

語彙力チェックでは「わからないときは、わからないと言っていい」ことを伝え、正誤にかかわらず、リズムよく進みましょう。オンライン・アセスメントでは対面より厳しい時間管理が必要です。

オンライン、ここがポイント！！

多くの Web 会議システムでは、背景をぼかしたり、背景に用意した写真等を使ったりできるようになっています。しかし、これらの機能を使うと、手元に持った紙や物、ジェスチャーを示そうとする手の動きなどには焦点が合わず、画面上に映りにくくなります。手元の紙や物を映したい、ジェスチャーを交えて伝えたい、というようなときは、こうした効果はオフにするようにしましょう。

ただし、正解がかなり少ないことで子どもが自信を失ったり、悲しくなったりすることは、絶対に避けなければなりません。正解した時に「すごいね！」とほめたり、日本語で言えないことばについて「母語では何て言うの？」と聞いて、教えてくれたら「そうなんだね！教えてくれてありがとう！」などと感謝を伝えたりするなどして、子どもの自己肯定感に配慮しましょう。子どもの表情などを注意深く見て、対応することがとても大切です。

全部終わった段階では、できたことをほめて、次に進みます。例えば、滞日年数が短くて正答率が低い場合などについては、「大丈夫！」「よくできたよ！」「日本に来て○カ月でしょ！すごいね！」などと言うことができます。

②〈聞く・話す〉

『改訂版 DLA』 p.19 ～ 27 参照

絵カードの PDF を画面共有して進めます。限られた時間なので、絵カードは選んで実施します。選び方は、子どもの実態に合わせて工夫しましょう。

子どもの実態があまりつかめていない場合などは、次ページの例のように基礎タスク、対話タスク、認知タスクを 1 枚ずつというやり方も考えられますが、限られた時間を効果的に使うためには、実際にはさまざまな選択が考えられます。事前ヒアリングの情報を活かして、子どもの実態に合わせて工夫しましょう。例えば、読む力がある程度あると想定される場合は〈読む〉に時間を割くため基礎タスクと認知タスクを 1 つずつ実施する、滞日期間から考えて読むことが難しいと想定される場合は、基礎タスクを中心に絵カードを多めにする、などです。また、『改訂版 DLA』p.22 にあるように、中学生や高校生の場合は、認知タスクの絵カードは使わず、自分の得意な教科で学習済みの概念について説明を求めてもかまいません。いずれにしても、思考・判断・表現を支える包括的なことばの力を見るためには、日本語の表面的な力ではなく、子どもの頭の中でどのような思考が動いているかを意識して、子どもの発話を聞くことが大切です。

オンライン、ここがポイント！！

子どもとの楽しい雰囲気づくりのためには、アセスメント実施者の画面上でのまなざしが重要です。実施者が手元の資料に目線を落としていると、子どもから、実施者は自分の方を見ていないことがはっきりとわかってしまいます。対面と違って、アセスメント実施者と子どもが同じ空間にいない分、まなざしが持つ意味が相対的に大きくなるといえるでしょう。子どもが常に見守られていると感じるような目線になるように意識しましょう。そのためには、p.20 に示したように、PC 画面上に、進め方や子どもへの指示などを記した資料を別ウィンドウで開いておくなどの工夫をするとよいでしょう。

また、オンラインの場合、語彙カードや〈聞く・話す〉の絵カードなどを画面共有していくことになりますが、そこで手間取ると、時間が足りなくなったり、せっかく作ってきた子どもとの楽しい雰囲気が途切れてしまったりします。画面共有の方法を事前にしっかりと確認してリズムよく進められるようにしましょう。

絵カードの選択例

タスク	使用するタスク・カード
基礎タスク	絵カードは 1 枚。「日課」のカードで、動詞の現在形（習慣）と過去形の使い分け、「～て、～て」のように順序に沿って（時系列で）行動を表現する力をみます。日課カードが難しい場合は、「教室」カード、「スポーツ」カード、「自分の夢」カードに切り替えてもよいでしょう。
対話タスク	絵カードは 1 枚。日本語のレベルがあまり高くない場合は、「先生に質問」のカードで、トイレに行ってもよいか許可を求めることができるか、教科書を忘れて先生や友達に貸してもらいたい場合に依頼ができるかをみます。レベルがある程度高ければ、「友達を誘う」のカードで、友達との会話をリードして、遊びの内容や時間・場所などを自分から提案できるかをみてもよいでしょう。
認知タスク	絵カードは 1 枚。教科学習と関連した内容について、まとまりある話ができるかどうかをみるので、タスクの内容は学年によって変えましょう。小学校低学年の場合は、「お話」カードで、３つの絵の中から子どもが知っている話を選び、ストーリーを順序に沿って話せるかをみるとよいでしょう。小学校４年生以上か中学生であれば、「環境問題」カードや「地震」カードなどを使い、教科学習につながる認知的な力がどの程度であるかをみていきます。高校生の場合は、絵カードではなく、自分の得意な教科で習ったことについて話してもらうこともできます。

③〈読む〉

『改訂版 DLA』 p.26 ～ 68 参照

教科を学ぶために必要なことばの力を測る上で最も重要なのが、〈読む〉の部分になります。このため、日本語のレベルが上がるほど、〈読む〉に多くの時間をあてるようにしましょう。

緊張しやすいオンライン・アセスメントでは、特に、一緒に本を読んで楽しむような雰囲気づくりが大切になってきます。子どもが本の内容に興味を示し、読書が好きになるきっかけづくりとなるような進め方を心がけましょう。

1）オンライン・アセスメントでのテキストの扱いについて

オンライン・アセスメントでは、子どもは手元にあるテキストを読むことになります。このため、アセスメント実施者からは、子どもの手元が見えないというデメリットがあります。例えば、「ことばの力のものさし」における「日本語の習得のステップ」のステップ３及びステップ４の記述文には、子どもが「指で文字をなぞりながら読む」とありますが、それにあてはまっているかどうかは、残念ながら見取ることはできません。他の記述文から判断することになります。

2）テキストの選定について

子どもがどのテキストを選ぶのかは、オンライン・アセスメントでも重要なポイントです。

画面の向こうにいる子どもの様子をよく確認して、子どもがどのテキストを選ぶか見ていきます。読み始める前に、テキストの絵や文字を見てもらって、読めそうか、どんなお話だ

と思うかなどを聞いていってもよいでしょう。その上で、冒頭を読ませて、そのテキストで進めるかどうかを判断します。実際に読んでみて、つまずきが大きいと判断したら、下のレベルのテキストを読むように働きかける必要があります。

『改訂版 DLA』の p.27 の「テキストの対象年齢枠」を参照するとともに、それぞれのテキストに関する説明の最初のページに示されている「テキストについての補足」をしっかり読み、適切なテキスト選定になるよう十分留意しましょう。

3）あらすじ再生の際の注意点について

オンライン実施の場合、あらすじ再生にあたって子どもがテキストを閉じているかどうかは、画面からは見えません。「テキストを閉じてください」としっかり伝えた上で、子どもに画面上でこちらを見てもらうように指示するなどして、再生を促していきましょう。

内容がよく理解できていないときには、一緒にテキストを見ながら、理解のための支援をしていきます。テキストを開いてもらって、ポイントになるような箇所について質問を投げかけたり、確認したりしながら、内容理解に導いていきましょう。「わかる」「おもしろい」という感覚を少しでも味わえることが大切です。DLA は単なる評価ツールではなく、子どもに学びの機会を提供し、やる気を引き出すためのものだということを忘れないようにしてください。

4）〈読む〉の終わりに

アセスメントの最後になりますので、がんばったことや、よかった点を挙げて、しっかりとほめて終わります。

子どもとのやりとりが終わったら、付き添っている先生にお礼を言って、Web 会議を終わります。

5．母語アセスメント

『改訂版 DLA』には、〈はじめの一歩〉と〈聞く・話す〉について、ポルトガル語、中国語、フィリピン語、ベトナム語、スペイン語、英語、ネパール語、ロシア語版が掲載されています。〈はじめの一歩〉と〈聞く・話す〉の内容や進行方法は日本語でのアセスメントとほぼ同じです。しかし、〈読む〉を中心に以下の（1）～（5）については違いがあり、準備や工夫が必要になってきます。

ここでは、母語アセスメント実施者を依頼するコーディネーターの視点から、日本語アセスメントとは異なる準備について記載していきます。

（1）母語アセスメント実施者への依頼と打ち合わせ

学校と直接やり取りをする日本語アセスメント実施者やコーディネーターが、母語でアセスメントできる人材を紹介します。母語アセスメントを実施する人材は、単に母語ができるというだけでなく、多文化多言語の子どものことばの発達について基本的な理解と経験を有し、適切にアセスメントを進め、ことばの力を見取ることが期待されます。学校現場で子どもの教育支援に長く従事している母語話者や、大学・大学院等で子どものことばの発達について学んだ経験のある母語話者などが適切でしょう。

適切な人材がみつかったら、日本語アセスメント実施者またはコーディネーターが、依頼内容を伝えます。母語アセスメントでは、〈読む〉のテキスト選定や、テキストのどの部分を子どもが読み、その後の質問をどうするかなどについて、母語アセスメント実施者に検討しておいてもらう必要があります。実施に向けて丁寧に打ち合わせましょう。

また、母語アセスメント実施者には、アセスメント実施後、引き続いて 30 ～ 40 分、評価に関わる打ち合わせの時間を取ってもらうようにします。

母語アセスメント実施者への依頼内容

①すべてオンラインで行われる、1 授業時間での母語アセスメントの実施と、引き続き 30 ～ 40 分の打ち合わせへの参加。
②チェックシートの確認と事前ヒアリング動画の視聴。
③〈読む〉の母語テキストの選定とアセスメントで使用するための準備。
④アセスメント・レポート作成に向けた相談。アセスメント・レポートの確認。必要に応じて、保護者あての文章の母語での作成等。

オンライン、ここがポイント！！

子どもの包括的なことばの力を把握するには、母語アセスメントは大変有効です。ただし、母語アセスメントの実施には、それができる人材の確保が欠かせません。日本語アセスメント実施者やコーディネーターは、日頃から、必要に応じて母語アセスメントができるよう、アセスメントができる母語話者の人材ネットワークを構築していきましょう。そうした人材は、学校現場が求める通訳者としても活躍が期待できます。

（2）母語テキストの選定

母語アセスメントでは、使用する母語テキストを、あらかじめ母語アセスメント実施者に選んでおいてもらう必要があります。テキストのレベルを判断するにあたっては、事前にアセスメント・チェックシートと事前ヒアリング動画を送り、参考にしてもらいます。

その上で、難易度を変えた数種類のテキストを用意してもらいます。例えば、「対象となる子どもの年齢相当のテキスト」、「年齢より２～３歳程度下のテキスト」、「４～６歳程度下のテキスト」などです。テキストの長さは、いずれも、通常であれば 10 分程度で読み上げられる長さのものにしてもらいましょう。

（3）母語テキストによる〈読む〉のアセスメント準備

それぞれのテキストについて、途中のどこまでを母語アセスメント実施者が読み、どこから子どもに読んでもらうのかを、あらかじめ検討しておいてもらいます。

また、読んだ後のあらすじ再生についても、ポイントを整理しておいてもらいます。

さらに、テキストの内容をどの程度理解しているのか、「思考・判断・表現を支える包括的なことばの力（複数言語での力）の発達ステージ」（以下、「包括的なことばの発達ステージ」）の記述文を参考にしながら、レベルに応じた質問（例:登場人物の行動の理由、テキストの主題など）を、３～５つ程度考えておいてもらいます。

（4）アセスメント終了後の打ち合わせ

オンライン・アセスメントが終了し、子どもや学校関係者が Web 会議から退室した後、そのまま、母語アセスメント実施者に時間をとってもらい、アセスメント・レポートの作成に向けた情報交換のための打ち合わせを 30 ～ 40 分程度、実施します。

日本語アセスメントについても実施している場合は、日本語アセスメント実施者と母語アセスメント実施者、コーディネーターが参加します。母語アセスメントのみ実施した場合は、母語アセスメント実施者とコーディネーターが参加します。

アセスメント後の打ち合わせにおける確認内容

①〈聞く・話す〉〈読む力〉について、「ことばの力のものさし」を参照して、「思考・判断・表現を支える包括的なことばの力」のステージを判断する。
②「ことばの力のものさし」の記述文を参考に、それぞれの「ことばの力についてのコメント」の欄に記載する文を確認する。
③「ことばの力を伸ばすために」の欄で、指導にあたって教員や支援員に伝えたい内容、保護者に伝えたい内容について、検討する。

（5）アセスメント・レポートの作成

アセスメント・レポートは、日本語と母語の両方のアセスメントを実施している場合は、日本語アセスメント実施者が中心となって、母語アセスメント実施者から聞き取った内容を踏まえて作成します。母語アセスメントのみ実施の場合は、アセスメント・レポートは、母語アセスメント実施者が作成するか、コーディネーターが母語アセスメント実施者から聞き取った内容を踏まえて作成します。最終的なアセスメント・レポートは、両者で確認した上で、学校に送付しましょう。

保護者が日本語で読むことが難しい場合は、アセスメント･レポートの「保護者の方へ」の欄に、日本語に加えて同じ内容を母語でも記載するとよいでしょう。その部分は、母語アセスメント実施者に依頼しましょう。

6．アセスメント実施後の流れ

コーディネーター・アセスメント実施者	学　　校
アセスメント実施 　母語の場合は、そのまま母語実施者と依頼者（レポート作成者）で評価を検討	
アセスメント・レポート作成・送付	アセスメント・レポートの受け取り 保護者への送付
フォローアップ会議の日程調整	フォローアップ会議の日程調整
フォローアップ会議（オンライン）	フォローアップ会議（オンライン）
	指導の充実
可能であれば、指導についての相談対応	必要に応じて、指導について相談

学校現場を訪問しないオンライン・アセスメントでは、アセスメント実施後の結果の通知やそれに基づくフォローアップの対応が大変重要になります。

アセスメント・レポートでは、子どもの「ことばの力」を適切に記入するだけでなく、事前ヒアリングで把握された学校の悩みや困り感なども踏まえて、学校での指導が充実するよう、「ことばの力を伸ばすために」の欄に助言を記載していきます。また、保護者にも、家庭でどのようなことに気を付けていくとよいかメッセージを記入します。アセスメント・レポート作成の詳細については、「7．アセスメント・レポート」を参照してください。

さらに、レポートを踏まえてどのような指導を行うかについて、アセスメント実施者と学校の関係者が参加する､オンラインのフォローアップ会議を開催することを強く推奨します｡特にコーディネーターは、このフォローアップが効果的に行えるように力を尽くしましょう。詳細については、「8．レポート送付後のフォローアップ」を参照してください。

7．アセスメント・レポート

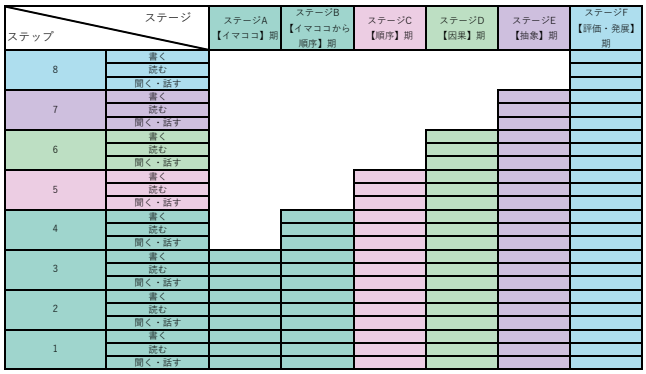
アセメント・レポートを作成して学校に送ります。

文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための「ことばの発達と習得のものさし」
DLA にもとづくアセスメント・レポート

学　校　名			名前		学年		年齢	
来日時期		来日時年齢		日本語の学習環境に入ってからの期間		つながりのある国	家庭言語	
実施年月日			アセスメント 担 当 者 名					

＜「ことばの力のものさし」に照らした〇〇さんのことばの力＞

		思考・判断・表現を支える包括的なことばの力	日本語固有の力
目標	聞く力 話す力		
目標	読む力		
現状	聞く力 話す力		
現状	読む力		



＜〇〇さんのことばの力についてのコメント＞

	思考・判断・表現を支える包括的なことばの力	日本語固有の力
話す力 聴く力		
読む力		

＜ことばの力を伸ばすために＞

学校の先生方及び支援員の方へ	
保護者の方へ	

アセスメント・レポート様式

アセスメント・レポートは、Excel 形式で作成することをお勧めします。作成したファイルをデータで学校に送りますが、さらに学校から保護者にアセスメント・レポートを送ってもらうにあたって、「ことばの力を伸ばすために」の欄を非表示にして印刷してもらうことで、簡単に保護者への結果報告が可能となります。

なお、本研究の成果を公表する文部科学省及び弘前大学文部科学省委託事業のホームページには、マニュアルと併せて、Excel 形式のアセスメント・レポートの様式をダウンロードできるようにしてありますので、活用してください。

URL　https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm
　　https://www.edu.hirosaki-u.ac.jp/mext-outsourcing.html

（1）子どもの基礎情報の記入について

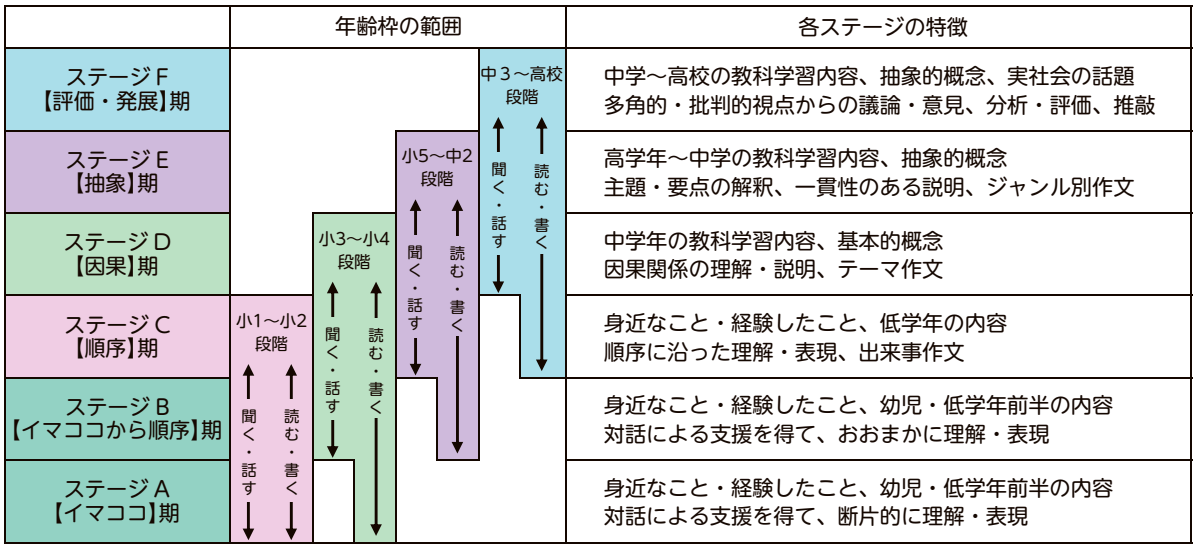
子どもの年齢や来日時期といった基礎情報は、子どもの特性や能力を正しく理解し、その後の指導方針を決定していく上で重要な情報となります。アセスメント・チェックシートや事前ヒアリングで得た情報をもとに、正確に記入しましょう。

（2）「『ことばの力のものさし』に照らした○○さんのことばの力」について

各技能領域について、「ことばの力のものさし」を参考にしながらアセスメントの結果を記入しましょう。「思考・判断・表現を支える包括的なことばの力」部分は、日本語も母語も含めた、子どもが持っているすべてのことばのレパートリーを使って最大限にできることを評価します。次のページの表は、「ことばの力のものさし」に記載されている「包括的なことばの発達ステージ」の各年齢段階の特徴をまとめたものです。これをみてもわかるように、「ことばの力のものさし」の「包括的なことばの発達ステージ」の表には、各ステージにおける発達の特徴と各ステージの年齢の目安（年齢枠）がまとめられています。

子どもがどのステージにいるかを判断する際には、まず年齢枠の範囲を確認し、対象の子どもがどの発達ステージの範囲にあてはまるかを確認します。その後、アセスメントからわかった子どもの状態と各発達ステージの状態を照らし合わせ、子どもにあてはまるステージを判断しましょう。もちろん、「ことばの力のものさし」に載っている年齢枠はあくまで目安であり、子どものことばの発達には個人差がありますので、子どもの年齢から想定されるステージの範囲に子どもが当てはまらないことがあります。年齢枠にとらわれ過ぎず、アセスメントから得られた子どもの状態に最も一致するステージを選択するようにしましょう。

「包括的なことばの発達ステージ」の各段階の特徴



一方で、「日本語固有の力」部分は、日本語の知識や技能の習得状況を、ステップ１～８の８段階で評価します。下の表は、「ことばの力のものさし」に記載されている、「日本語の習得ステップ」の各年齢段階の特徴をまとめたものです。「日本語の習得ステップ」でも、各ステップにおける発達の特徴と各ステップにあてはまる年齢段階の目安がまとめてあります。

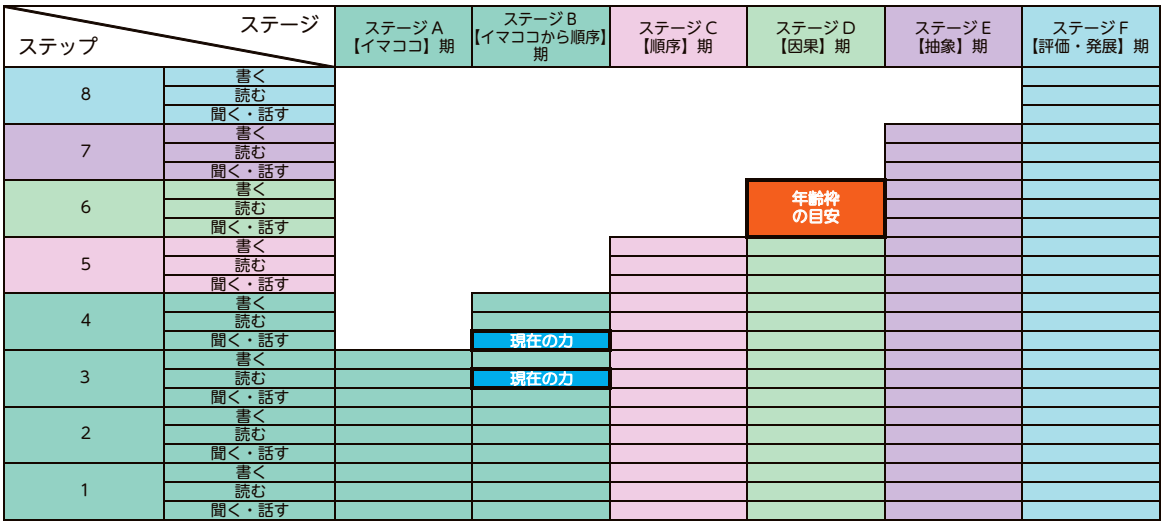
「日本語の習得ステップ」の各段階の特徴

	小１～小２段階	小３～小４段階	小５～中２段階	中３～高校段階
ステップ８				中学校から高校レベルの教科学習に必要な語彙・表現、談話・文章
ステップ７			高学年から中学レベルの教科学習に必要な語彙・表現、談話・文章	
ステップ６		中学レベルの教科学習に必要な語彙・表現、談話・文章		
ステップ５	日常的な語彙・表現（幅広い）、低学年レベルの談話・文章（自由な単文・重文・複文の生成）			
ステップ４	日常的な語彙・表現（制限あり）、単文から基礎的な重文・複文			
ステップ３	身近な語彙・表現、単文			
ステップ１～２	ごく限られた語、文字の習得の開始			

子どもがどのステップにいるかを判断する際には、まず子どもの年齢段階にあてはまるステップの範囲を確認します。その後、アセスメントからわかった子どもの状態と各ステップの状態を照らし合わせ、子どもにあてはまるステップを判断しましょう。子どものステップが明らかになったら、「ことばの力のものさし」に載っている各ステップの特徴を参考にしながら、アセスメント・レポートを記入しましょう。

「『ことばの力のものさし』に照らした○○さんのことばの力」の右側の図では、「包括的なことばの発達ステージ」を横軸、「日本語の習得ステップ」を縦軸として、対象の子どもの現在のことばの力を記入します。「包括的なことばの発達ステージ」には、日本語と母語の技能の中で一番高いステージを記入してください。「日本語の習得ステップ」では、技能ごとに現在の力を記入して

ステージとステップのマトリックス図の記入例（滞日７年の小学３年生の例）



ください。マトリックス図の中には、〈書く〉についての項目がありますが、オンライン・アセスメントでは〈書く〉についてのアセスメントは実施しませんので、記入時点で〈書く〉については空欄のままで問題ありません。

次に、当該の子どもの年齢枠の目安を記入します。現在の力と年齢枠の目安との関係及び来日時期・滞日年数などの基本情報を参考にしながら、「ことばの力を伸ばすために」の部分で具体的な助言をしていくようにしましょう。

なお、マトリックス図では、最終的には指導の目標も入れ、具体的な学習・指導計画を検討することになりますが、それは、事後のフォローアップ会議で、学校の教員と協議しながら進めるとよいでしょう。

（3）「○○さんのことばの力についてのコメント」について

この部分では、アセスメントで明らかとなった子どものステージやステップに基づいて、技能領域ごとに子どもの状態について記入していきます。アセスメントの録画を見て、どのステージやステップにあてはまるかを判断していきます。その際、事前ヒアリングで聞きとった日常の様子も判断材料になるでしょう。「ことばの力のものさし」には、各ステージ・ステップの特徴がまとめてありますので、参考にしながら記入していきます。「思考･判断･表現を支える包括的なことばの力」は左側の欄に、「日本語固有の力」は右側の欄に記入します。

しかし、実際には、「ことばの力のものさし」に記載されているステージやステップのレベルを表す文章と、アセスメントの中で見取った子どもの特徴が常にぴったり合うというわけではありません。オンライン・アセスメントは、対面で実施するアセスメントよりも時間が限られ、画面上見取れない内容もあります。「ことばの力のものさし」の記述文をそのまま写すのではなく、アセスメントでわかった子どもの状態に合わせて記入するようにしましょう。見取れなかった部分については無理に書こうとせず、アセスメントで見取れた部分について正確に記入していくことを意識するとよいでしょう。その際、アセスメント時の子どもの様子から、〈聞く・話す〉では、積極的にコミュニケーションを取ろうとしているかといった意欲などについても評価するとよいでしょう。

また、〈読む〉についても、本の世界を楽しもうとしているかなど、読むことについての姿勢などについても記載することができるでしょう。

オンライン・アセスメントで見取ることができない内容は、事後のフォローアップ会議で学校の先生方と話しながら検討することができます。その意味で、アセスメント・レポートは絶対的なものではなく、フォローアップ会議のための資料として位置づけるのが適切だといえます。

（4）「ことばの力を伸ばすために」について

1）「ことばの力を伸ばすために」において意識する点

以下の５つの側面を基本として助言を記入してください。子どもの状態や今後の支援の在り方についてより具体的に記入しましょう。

A）複数言語で成長することへの配慮（母語・継承語の尊重、母語・日本語両方の伸長等）
B）学習形態・環境への配慮（取り出しや放課後補習の必要性、学級での学習の際の配慮等）
C）日本語の学習内容・教材・指導方法（具体的な学習内容・教材名・指導方法や指導上の工夫等）
D）教科学習について（日本語の力、母語の力、年齢との関係からの判断、取り出す教科、補習等）
E）日本語指導担当と、担任や教科担当の連携について

学習指導に関する助言については、『実践ガイド』の実践編「第５章　実践記録集」（p.44 ～ 183）及び資料編「第６章　作文指導の中での書く力の評価」（p.186 ～ 199）を参考にすることで、より具体的な助言が可能になるでしょう。

また、子どもに対する指導や支援について、学校側や保護者が以下のような誤った知識を持っている可能性を感じた場合には、その考えが修正されるような内容を入れるとよいでしょう。

- 子どもはことばを覚えるのが早いので、放っておいても自然に言語を覚えられるだろう。
- 家庭で母語を使っているので、子どもの日本語が伸びない。家庭でも日本語を話すように指導した方がよいだろう。
- 流ちょうに日本語を話せる / 日常会話において日本語の問題はないので支援は必要ない。勉強ができないのは、本人のやる気がないせいだろう。
- 翻訳アプリがあるので、それ以外の支援は特に必要ないだろう。
- 日本語の指導や支援は、日本語教師の資格のある支援員に任せておけばいいだろう。
- 日本語ができないので、授業への参加はできないだろう。授業への参加は日本語ができるようになってからがよいだろう。

オンライン、ここがポイント！！

オンライン・アセスメントでは、レポートが学校や保護者への最初のフィードバックになります。子どものことばの力の評価については簡潔かつ的確に、〈ことばの力を伸ばすために〉での助言は、学校や保護者に寄り添って記載するようにしましょう。アセスメント・レポートの内容が、その後の学校との連携の基礎になります。

2）「ことばの力を伸ばすために」部分の記入例

「学校の先生方及び支援員の方へ」部分と「保護者の方へ」部分の具体的な例文をいくつか紹介します。アセスメント・レポートを作成する上での参考としてください。

「学校の先生方、支援員の方へ」部分の記入例	**A）複数言語で成長することへの配慮** • さまざまな先生方からの声かけは、子どもの自己肯定感を高めますので、母語や母文化を尊重する姿勢を大切にしつつ、多くの先生方に温かく接していただければと思います。 • 母語の力を発揮したり、母国についての知識を活用できる場を作るなどして、複言語、複文化を持つことに自信を持たせたり、他の児童生徒が異文化を学ぶ機会とするとよいでしょう。 • 保護者との連携を密にとり、本人及び保護者の言語・文化が学校でも尊重されているということをさまざまな機会を通じて伝えられるとよいと思います。そうした取り組みの中で、本人がバイリンガルとしての自分のアイデンティティを強固なものとし、両方の言語資源を積極的に活用できるように支えていきましょう。 • 当該児童・生徒の存在によって、周りの子どもたちが多様性と多文化共生を実感できるような環境づくりをするとよいでしょう。 • 自己肯定感を育むために、母語や母文化を尊重する姿勢を大切にしていただければと思います。 **B）学習形態・環境への配慮** • 取り出し指導の中で、母語の力も借りながらクラスで学ぶ内容を理解し、その内容について、日本語で説明したり自分の考えを表現したりできるようにしてから、教室でクラスメイトとともに学ぶようにするなどの取り組みをするとよいでしょう。 • 日本語指導では、教科と関連した語彙や表現を習得することに重きを置いた指導が必要であり、取り出し指導で学んだ教科学習の語彙や表現を使って話す機会を在籍学級の学習の場で設定するなどの配慮が求められます。 • 取り出しの日本語指導の必要はなさそうですが、教室での学習においては、担任の先生の支援は必要でしょう。 • 楽しく対話に参加できるように、朝の会での短いスピーチなど、日本語使用の機会を増やしたり、日本語の摂取量が多くなるように座席の指定や仲間づくりに配慮したりするとよいでしょう。 • 学年が進む中で、学習言語の習得に若干の遅れが出ることもあるかもしれません。それを防ぐためには、日頃から多くの本に触れる環境をつくるとともに、指導者が子ども本人のつまずきに気づくことが大切でしょう。

C）日本語の学習内容・教材・指導法

- わからないことを質問できなかったり、わからないことばを無意識に聞き流してしまったりすることがありそうです。子どもの様子や反応を見て、タイミングよく声かけをしてあげてください。
- 日本語の語彙数が少ないことで、自分の思いをうまく伝えることができない場面もあると思います。何がしたいのか、何が言いたいのか、しっかりと耳を傾けてあげてください。
- 読書などでインプットを増やすことと同時に、それをもとに話したり書いたりしてアウトプットさせることも大切です。アウトプットした日本語の表現の正しさ、因果関係など文脈の正しさを高める支援をしていくことが、今後、学習を進める上で重要でしょう。
- 学級では、日本語でスピーチしたり人前で発表したりする場を設定するなど、自信を育むことが、一層、日本語の習得を促進すると考えられます。
- 新しく耳にする語彙や語句については、その意味を想像させたり、活用の仕方を具体的に教えたりし、丁寧に指導することが求められます。また、単語レベルでの発話を文レベルで促すなど、まとまりのある話ができるよう寄り添いながらスモールステップで指導します。

D）教科学習について

- 学級での学習に参加する際には、担任や教科担当がやさしい日本語でゆっくり指示や説明を行ったり、視覚的な教材を示したりするなどの配慮が求められます。
- 取り出し指導の中で、母語の力も借りながら在籍学級で学ぶ内容を理解し、その内容について、日本語で説明したり自分の考えを表現したりできるようにしてから、教室でクラスメイトとともに学ぶようにするなどの取り組みをするとよいでしょう。
- 学年が上がるにつれて、教科特有の語彙や表現の理解が難しくなることが考えられますので、聴いてわかるだけでなく使える語彙にするために、話の内容を再話させたりするなど指導の工夫が求められます。
- 教科学習では、各教科の中心的な概念についてやさしい日本語で学べるように、支援員や教科担当がサポートしましょう。ポイントになる概念やキーワードを、翻訳機を使って母語で示したりするとよいでしょう。
- 本人が、助けを求めることを恥ずかしがって隠しているうちに、課題が大きくなってしまうことのないよう、丁寧に読みや書きの支援をすることが必要です。

	E）日本語指導担当と、担任や教科担当の連携について • 担任・教科担当・支援員等の間で、本人の日本語のレベルについての情報を共有し、連携してサポートできるようにしましょう。 • 学年が上がるにつれて周囲との差が出てくる可能性もありますので、日本語指導者と担任・教科担当の日常的な連携を大切にしましょう。 • 取り出し指導で学んだことを、在籍学級での学習や周囲とのコミュニケーションの中で使うことができるよう、日本語指導者と担任・教科担当の日常的な連携を大切にしましょう。 • 取り出し指導の中で在籍学級での授業に参加するための先行学習（例えば単元のキーワードの予習や発表の準備など）をするなど、在籍学級と取り出し教室との連携が非常に大切です。 • 楽しく対話に参加できるように、朝の会での短いスピーチなど、日本語使用の機会を増やしたり、日本語の摂取量が多くなるように座席の指定や仲間づくりに配慮したりするとよいでしょう。
「保護者の方へ」部分の記入例	**A）複数言語で成長することへの配慮** • 家庭では相手に応じて母語または日本語を使い分けており、二つの言語が家族間でのコミュニケーション、教科学習を支えるためのツールとなっています。引き続き、二つの言語を大切にする姿勢で、成長を見守っていきましょう。 • 母語で複雑な現象を理解したり考えたり表現したりする力は、日本語で教科を学ぶ際に活かされていきます。ぜひ、母語でも、さまざまな本を読んだり、家族でニュースを見て語り合ったりする経験を積み上げていきましょう。 • 二言語が話せる家庭環境は、とても素晴らしいと思います。アイデンティティ形成のためにも今後も母語を保持する働きかけは続けてください。 **B）学習形態・環境への配慮** • 母語でのリテラシーは、教科の学習にも活かしていくことができます。今後もぜひさまざまなジャンルの本に触れられる環境を維持していただければと思います。 • 家庭での学習習慣をつけることが大切です。「今日何をした？」「宿題は？」など毎日声かけをしてあげてください。 • 日本語の語彙の力を高めるために、母語で知っている語彙の日本語を確認したり、日本語の本での読み聞かせを継続したりするなどして、無理のない範囲で、日本語で理解したり表現したりする機会を確保することが望ましいです。

	C）日本語の学習内容・教材・指導法 • 読書習慣がつくように支援することが必要でしょう。図書館を利用して、年齢が低い子どもには絵本を読ませるなど、年齢に合った本人が楽しめる本が選べる環境をつくりましょう。少し年齢が高い子どもにはさまざまな日本語レベルの本が選べる「にほんごたどく」（https://tadoku.org/japanese/）などを利用すると、無理なく読めるレベルのものを探すことができます。 • 日本語の生活言語能力はしっかりと身についていますから、日常生活で困ることはないでしょう。これからは、教科学習を支えることばの力を伸ばしていきましょう。 • 母語の語彙を増やし、自分が伝えたいことを伝えられるように家庭でのインプットの質を高めるようなかかわり方を今後も継続することができればよいと思います。

8．レポート送付後のフォローアップ

アセスメントは、指導とつながってこそ意味があります。ここでは、アセスメント・レポート送付後のフォローアップについて、記載します。学校の希望も聞きながら、コーディネーターやアセスメント実施者が無理のない形で学校現場をフォローしていくことで、よりよい指導につなげることができるでしょう。

（1）フォローアップ会議

1授業時間程度で、Web 会議を開き、フォローアップのための情報交換を行います。レポートの見方を説明するとともに、指導のための「目標」を設定し、そのための具体的な指導の工夫などを話し合います。

進め方は、次の通りです。

①学校の先生方や保護者が、アセスメント・レポートをどう受け取ったか、率直な感想や反応を聞きましょう。

②アセスメント実施者は、アセスメント・レポートの見方を説明しましょう。特に、「ことばの力のものさし」の考え方を丁寧に解説し、「包括的なことばの発達ステージ」と「日本語の習得ステップ」のマトリックス図の上での子どもの「現在の力」と、「年齢相応の目安」を皆で確認しましょう。必要に応じて、アセスメント・レポートや、『ここがポイント！ 文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための「ことばの発達と習得のものさし」パッとわかるまるわかりガイド』を画面共有するなどの工夫をしてもよいでしょう。

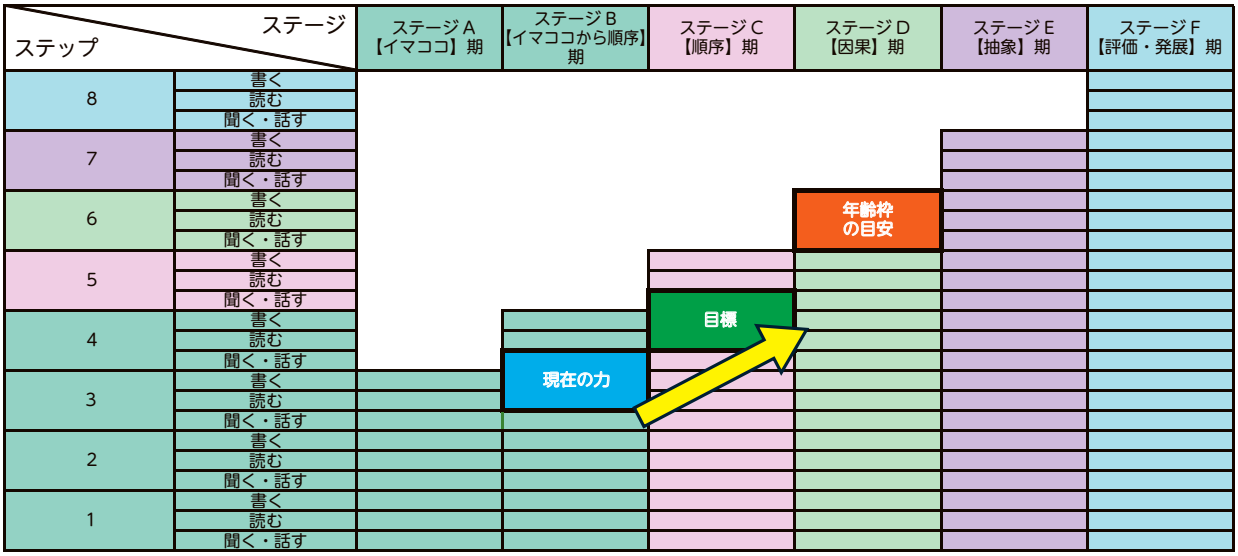
③〈書く〉については、『改訂版 DLA』には含まれていません。学校の先生方の日常の観察での見取りを聞きながら、『実践ガイド』「第3章 3．4 ことばの力のものさし〈書く〉」（p.23～26）及び「第6章 作文指導の中での書く力の評価」（p.186～199）を参考にして、〈書く〉の「現在の力」のステップを検討します。この際、〈書く〉の「包括的なことばの発達ステージ」と「日本語の習得ステップ」の表を画面共有してもよいでしょう。相談の上で、〈書く〉の「現在の力」のステップをアセスメント・レポートのマトリックス図に記入しましょう。

④その上で、『実践ガイド』の「第4章 『ことばの力のものさし』を活用した評価から指導・支援へ」（p.34～42）を参照して、学校の先生方とコーディネーター及びアセスメント実施者で、3か月あるいは半年後の指導上の「目標」を設定します。

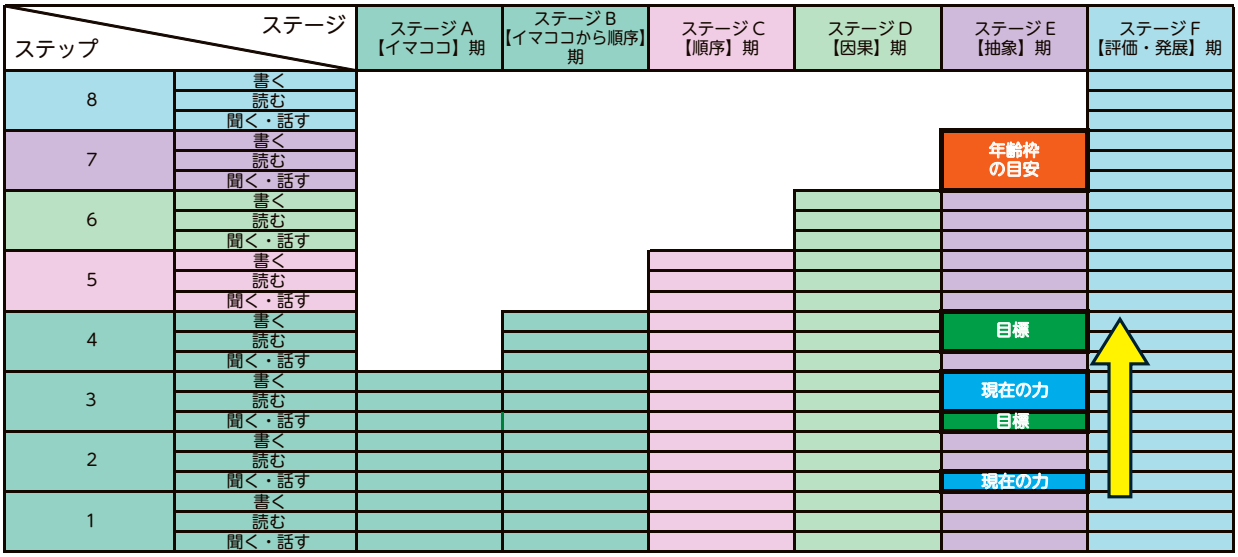
⑤斜め方向の支援が必要なのか、縦方向の支援が必要なのかを判断した上で、「目標」に向けて、学校でどのような指導が有効か、具体的に相談しましょう。取り出しをしている場合には、取り出しで取り組む内容だけでなく、取り出しでの学習内容を在籍学級での学習参加につなげる方法や、在籍学級での配慮などについても検討するとよいでしょう。また、『実践ガイド』の「第５章　実践記録集」（p.44 ～ 183）等から、参考になる事例を紹介することもできます。基本的な姿勢として、母語も含むすべてのことばの力を活かすトランスランゲージング教育の視点で取り組んでいくことの重要性を伝え、そのためにできることについても助言しましょう。その際、適切な ICT ツール活用も促すとよいでしょう（p.42 Column 参照）。

⑥家庭での母語の使用も含め、多文化多言語で育つことを肯定的に受け止める重要性について伝え、学校として多文化共生の教育にどのように取り組めるか、検討しましょう。

斜め方向の支援が必要な事例（滞日期間７年の小学３年生）



縦方向の支援が必要な事例（滞日期間４カ月の中学２年生）



（2）フォローアップのための相談対応

子どものことばの力は、一朝一夕に伸びるものではありません。息の長い取り組みが必要です。コーディネーターは、今後のアセスメント実施や、指導に関わる相談について対応可能な内容を伝えましょう。常設の相談窓口がある場合には連絡先を伝えることも大切です。

アセスメント実施者は、単発のアセスメント実施で終わることなく、教育委員会ともできるだけ連携しながら、多文化多言語の子どもたちと、子どもたちが学ぶ学校を支えていきましょう。

オンライン、ここがポイント！！

新たに開発された「ことばの力のものさし」は、「思考・判断・表現を支える包括的なことばの力（複数言語での力）の発達ステージ」と、「日本語固有の知識・技能の習得ステップ」の２つの側面から子どものことばの力を捉えるという点で、これまでにない視点を学校現場にもたらすものとなっています。

この新たな視点に立って、子どもの「現在の力」を捉え、「目安」を意識しながら、適切に指導の「目標」を設定し、具体的な指導のあり方を検討する必要があります。しかし、これまで受け入れ経験をもたない学校などの場合、このプロセスを学校の先生方だけで進めるのは難しい場合もあります。

オンライン・アセスメントの場合、その部分を支えるのが、フォローアップ会議やフォローアップのための相談対応です。オンライン・アセスメントを適切な学習指導につなげていくためには、こうした機会が極めて重要だといえるでしょう。コーディネーター及びアセスメント実施者は、「ことばの力のものさし」の『実践ガイド』を読み込み、アセスメントの専門家・熟達者であるだけでなく、アセスメントに基づく指導についてのよき助言者となれるようにしましょう。

なお、ここではフォローアップについて、フォローアップ会議と相談対応を挙げましたが、他にもさまざまなフォローの方法が考えられます。地域や学校の実情に合わせて、工夫してみてください。

Column　トランスランゲージング教育と ICT 活用

トランスランゲージング教育とは、子どものもつすべての言語資源を最大限活かす教育の在り方を指します。そこでは教育者は、バイリンガル・マルチリンガルの子どもたちが持つ言語資源すべてを価値あるものとして認め尊重するスタンスに立って、子どもの言語パフォーマンスを観察し、子どものことばの力を最大限伸ばす適切なタスクを設定して授業をデザインしていきます。オンライン・アセスメントのフォローアップにおいても、アセスメントで見取った子どものことばの力に応じて、トランスランゲージング教育の視点を取り入れた指導の在り方を検討していきましょう。

教科学習において、すべてを日本語だけで学ぶ必要はありません。母語のリテラシーが高い子どもであれば、インターネット上で翻訳機能を活用するなどして、母語を使って教科内容を理解することもできます。その前提には、検索のために漢字の音がわかる必要がありますが、障害のある児童及び生徒のための教科用特定図書等の普及の促進等に関する法律（以下、教科書バリアフリー法）の一部改正（2024）により、教科書の内容の読み上げや漢字のルビ振り等の機能を持つ音声教材を、日本語指導が必要な子どもにも提供できるようになりました。学校は、その子どもに合ったデジタル環境を整えて、サポートするとよいでしょう。

例えば、①単元の核となる概念や用語をルビ付で表示する、②ルビを手掛かりに検索・翻訳して母語にする、③その意味内容を検索して母語教材で理解する、④それを母語で要約してみる、⑤それを日本語に翻訳し直す、⑥日本語の要約を教員に確認して修正してもらうなどして、教科内容と日本語の両方を身に付けていく、⑦周囲の生徒にも、母語ではこのように説明できると伝える、などの活動もできるでしょう。

※改正教科書バリアフリー法については、下のホームページを参照してください。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/1339531_00003.htm

9．参考資料

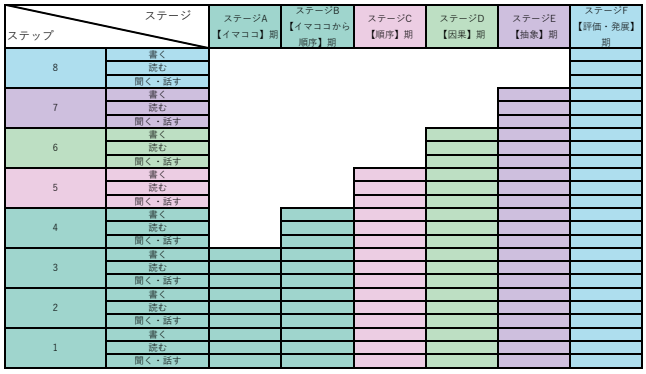
（1）アセスメント・レポート様式

文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための「ことばの発達と習得のものさし」
DLA にもとづくアセスメント・レポート

学　校　名			名前		学年		年齢	
来日時期		来日時年齢		日本語の学習環境に入ってからの期間		つながりのある国	家庭言語	
実施年月日			アセスメント 担 当 者 名					

＜「ことばの力のものさし」に照らした○○さんのことばの力＞

		思考・判断・表現を支える包括的なことばの力	日本語固有の力
目標	聞く力 話す力		
目標	読む力		
現状	聞く力 話す力		
現状	読む力		



＜○○さんのことばの力についてのコメント＞

	思考・判断・表現を支える包括的なことばの力	日本語固有の力
話す力 聴く力		
読む力		

＜ことばの力を伸ばすために＞

学校の先生方及び支援員の方へ	
保護者の方へ	

（2）同意書多言語版（ポルトガル語）

Formulário de consentimento para avaliação da “Habilidade linguística” das crianças (versão online)

Ano　Mês　Dia

Nome _____

◆ Leia a explicação a seguir e caso esteja de acordo com o conteúdo, assinale em “□ Sim” no final da explicação.

1. Objetivo

(1) O objetivo desta avaliação é entender “o que uma criança pode fazer” usando todas as palavras que tem conhecimento, a partir de múltiplas perspectivas e múltiplos aspectos por meio do diálogo online.

(2) Além disso, temos como objetivo aproveitar as informações obtidas para dar orientação e suporte no aprendizado subsequente.

2. Conteúdo da avaliação

(1) A avaliação que será realizada é chamada de DLA (Dialogic Language Assessment for Culturally and Linguistically Diverse Children - Avaliação da Linguagem Dialógica para Crianças com Diversidade Cultural e Linguística).

(2) A avaliação é conduzida por instrutores de língua japonesa especializados, que receberam treinamento profissional.

(3) A avaliação é realizada em formato online entre a criança e o provedor, individualmente.

(4) O conteúdo leva cerca de 45 a 50 minutos no total, consistindo em conversação introdutória (cerca de 5 minutos), habilidades de vocabulário (cerca de 5 minutos), habilidades de fala e audição (cerca de 8 minutos) e habilidades de leitura (cerca de 25 minutos).

3. Sobre o dever de confidencialidade

(1) Uma vez que levamos a privacidade a sério, não será prejudicado(a) de forma alguma por se submeter à avaliação.

(2) Os resultados da avaliação não serão divulgados para pessoas sem relação com a escola na qual tanto o avaliador e a criança pertencem.

4. Relatório dos resultados da avaliação

(1) Os resultados da avaliação serão organizados no "Relatório de Avaliação" e entregue em uma folha A4.

Está de acordo com a avaliação acima depois de entender o objetivo, o conteúdo e o tratamento de dados pessoais da avaliação? (Marque um dos dois)

☐ Sim
☐ Não

儿童“语言能力”评估同意书（线上版）

年 月 日

姓名 _____

◆请阅读以下说明，如果您同意以下内容，请在说明的最后勾选“□是”。

1. 关于目的

（1）此项评估的目的是通过线上对话，从多角度和多方面了解孩子运用其掌握的所有词汇“能够做些什么”。

（2）此外还有另一个目的是利用获得的信息来指导和支持后续的学习。

2. 关于评估内容

（1）实施的评估为 DLA（Dialogic Language Assessment for Culturally and Linguistically Diverse Children）。

（2）评估由经过专业培训的日语指导专家进行。

（3）评估采用线上方式，由孩子和评估实施者一对一进行。

（4）内容包括引入对话（约 5 分钟）、词汇能力（约 5 分钟）、听/说能力（约 8 分钟）以及阅读能力（约 25 分钟），总计约 45 至 50 分钟。

3. 关于保密义务

（1）我们非常重视保护隐私，因此接受评估不会给您带来任何不利影响。

（2）除了评估实施者和孩子所在学校的相关人员之外，其他人不会知晓评估结果。

4. 关于评估结果报告

（1）评估结果将会被汇总成一份 A4 纸一页左右的“评估报告”交给您。

您是否已了解上述评估的目的、内容及个人信息的处理方式等，并同意实施评估？（请勾选其中一项）

□ 是
□ 否

Kasulatan ng Pagsang-ayon sa Assessment sa “Kakayahan sa Wika” ng Anak
(Online na Bersyon)

(taon)　　/ (buwan)　/ (araw)

Pangalan　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

◆Mangyaring basahin ang mga sumusunod na paliwanag at kung sumasang-ayon, lagyan ng tsek ang “□ Oo” sa dulo ng paliwanag.

1. Tungkol sa layunin

(1) Nilalayon ng assessment na ito na malaman kung “ano ang maaaring gawin” ng inyong anak gamit ang lahat ng mga taglay niyang salita, mula sa maraming perspektiba at maraming larangan sa pamamagitan ng online na pakikipag-usap.
(2) Layunin din nito na magamit ang mga nakuhang impormasyon upang gabayan at suportahan siya sa kanyang pag-aaral sa hinaharap.

2. Tungkol sa nilalaman ng assessment

(1) Ang isasagawang assessment ay tinatawag na DLA (Dialogic Language Assessment for Culturally and Linguistically Diverse Children).
(2) Ang assessment ay isasagawa ng mga dalubhasa sa pagtuturo ng wikang Hapon na sumailalim sa propesyonal na pagsasanay.
(3) Ang assessment ay isasagawa online nang one-on-one sa pagitan ng bata at ng tagasuri.
(4) Ang nilalaman ay binubuo ng panimulang pag-uusap (mga 5 minuto), kakayahan sa bokabularyo (mga 5 minuto), kakayahan sa pagsasalita at pakikinig (mga 8 minuto), at kakayahan sa pagbabasa (mga 25 minuto), na tumatagal nang humigit-kumulang 45 hanggang 50 minuto sa kabuuan.

3. Tungkol sa pagkakumpidensyal

(1) Walang anumang magiging kawalan bilang resulta ng pagsailalim sa assessment dahil sapat na isasaalang-alang ang inyong privacy.
(2) Ang mga resulta ng assessment ay hindi malalaman ng ibang tao maliban sa tagasuri at mga nauugnay na tao sa paaralang kinabibilangan ng inyong anak.

4. Tungkol sa pag-uulat ng mga resulta ng assessment

(1) Ang mga resulta ng assessment ay ibubuod sa humigit-kumulang isang A4 size na pahina bilang “Ulat sa Assessment” at ibibigay ito sa inyo.

Tungkol sa pagsasagawa ng assessment na nabanggit sa itaas, sumasang-ayon ka ba matapos maunawaan ang layunin at nilalaman ng assessment, paghawak sa personal na impormasyon, atbp.? (Lagyan ng tsek ang alinman)

☐ Oo
☐ Hindi

同意書多言語版（ベトナム語）

GIẤY ĐỒNG Ý THỰC HIỆN ĐÁNH GIÁ ĐO LƯỜNG “NĂNG LỰC NGÔN NGỮ” CỦA TRẺ
(PHIÊN BẢN TRỰC TUYẾN)

Ngày　　tháng　　năm

Họ tên _____

◆Trong trường hợp sau khi đã đọc phần nội dung giải thích dưới đây và đồng ý với nội dung, vui lòng đánh dấu vào ô “□ Có” ở dưới cùng của phần giải thích.

1. Về mục đích

(1) Đánh giá này nhằm mục đích nắm bắt một cách đa góc độ và đa phương diện thông qua đối thoại trực tuyến để xem trẻ “có thể làm được những gì” bằng cách sử dụng tất cả những từ ngữ mà bản thân mình có.
(2) Và còn nhằm mục đích sử dụng các thông tin đã thu được để giúp ích cho công tác chỉ đạo, hỗ trợ cho việc học tập sau này.

2. Về nội dung đánh giá

(1) Đánh giá sẽ thực hiện là DLA (Dialogic Language Assessment for Culturally and Linguistically Diverse Children).
(2) Đánh giá sẽ được thực hiện bởi chuyên gia dạy tiếng Nhật đã được đào tạo, huấn luyện chuyên nghiệp.
(3) Đánh giá sẽ được thực hiện trực tuyến, theo hình thức 1-1 giữa trẻ và người thực hiện.
(4) Nội dung sẽ khoảng 45 ~ 50 phút, bao gồm phần hội thoại mở đầu (khoảng 5 phút), năng lực từ vựng (khoảng 5 phút), năng lực nói, nghe (khoảng 8 phút) và năng lực đọc (khoảng 25 phút).

3. Về nghĩa vụ bảo mật

(1) Quyền riêng tư sẽ được bảo đảm một cách đầy đủ, vì thế sẽ không gặp bất cứ bất lợi nào khi tham gia đánh giá.
(2) Kết quả thu được từ việc đánh giá, sẽ chỉ có người thực hiện và những người có liên quan tại trường học mà trẻ trực thuộc mới được biết.

4. Về việc báo cáo kết quả đánh giá

(1) Về kết quả đánh giá, chúng tôi sẽ tổng hợp lại thành "Báo cáo đánh giá" gói gọn trong khoảng một trang giấy A4 và gửi lại cho bạn.

Sau khi đã hiểu rõ mục đích, nội dung, việc xử lý thông tin cá nhân, v.v. của đánh giá, bạn có đồng ý với việc thực hiện đánh giá nêu trên không? (Vui lòng đánh dấu vào một trong hai lựa chọn)

☐ Có
☐ Không

Formulario de consentimiento para la evaluación de la "capacidad lingüística" de los estudiantes (versión online)

Año　　Mes　　Día

Nombre _____

◆ Por favor lea la siguiente explicación y si está de acuerdo con ella marque en la casilla de "□　Sí" al final de la explicación.

1. Propósito

(1) Esta evaluación tiene como objetivo comprender, de manera multifacética y desde diversas perspectivas, "qué pueden hacer" los estudiantes utilizando todas las palabras que poseen, a través de un diálogo en línea.
(2) El objetivo es utilizar la información obtenida para guiar y apoyar a los estudiantes en su aprendizaje posterior.

2. Contenido de la evaluación

(1) La evaluación que se realizará se denomina DLA (por sus siglas en inglés - Evaluación Dialógica del Lenguaje para Niños Culturaly Lingüísticamente Diversos-).
(2) La evaluación será realizada por especialistas en enseñanza del japonés capacitados profesionalmente.
(3) La evaluación será realizada en línea, uno a uno entre el estudiante y el evaluador.
(4) El contenido constará de conversación introductoria (aproximadamente 5 minutos), habilidades de vocabulario (aproximadamente 5 minutos), habilidades para hablar y escuchar (aproximadamente 8 minutos) y habilidades de lectura (aproximadamente 25 minutos) con una duración total de aproximadamente 45 a 50 minutos.

3. Confidencialidad

(1) Tomamos el máximo cuidado para proteger la privacidad, por lo que realizar la evaluación no tendrá ningún impacto negativo para usted.
(2) Los resultados de la evaluación solo serán conocidos por el evaluador y el personal de la escuela a la que asiste el estudiante.

4. Comunicación del resultado de la evaluación

(1) El resultado de la evaluación le será entregado resumido en un "Informe de evaluación" de aproximadamente una página A4.

¿Está de acuerdo con la evaluación que le fue explicada, después de haber comprendido su propósito, contenido, manejo de la información personal y demás aspectos? (Marque una de las dos casillas)

☐ Sí
☐ No

同意書多言語版（英語）

Consent Form for Assessment of Child's Language Ability (Online Version)

Date　/　　/

Name _____

◆ Please read the following explanation. To indicate your consent, check the "Yes" box at the end of the explanation.

1. Purpose

(1) Through online interaction, this assessment aims to understand from multiple perspectives what a child is able to do through an online dialogue, using all the words he or she possesses.
(2) The intent is to use the information gained to guide and support students in their subsequent learning.

2. Contents of assessment

(1) This assessment is called DLA (Dialogic Language Assessment for Culturally and Linguistically Diverse Children).
(2) Assessments are conducted by professionally trained Japanese language instructors.
(3) The assessment is conducted online, on a one-on-one basis, between the child and the assessing instructor.
(4) The assessment will take about 45 to 50 minutes in total, and will comprise an introductory conversation (about 5 minutes), vocabulary skills (about 5 minutes), speaking and listening skills (about 8 minutes), and reading skills (about 25 minutes).

3. Confidentiality

(1) We will take privacy very seriously, and no student will suffer any disadvantage as a result of undertaking this assessment.
(2) The results of the assessment will not be disclosed, except to those conducting the assessment and personnel at your child's school.

4. Reporting of assessment results

(1) The results of the assessment will be compiled into an Assessment Report, approximately one A4 page in length, which will be given to you.

Having understood the purpose, content, and handling of personal information in this assessment, do you consent to the above assessment being performed? (Please check one only)

☐ Yes
☐ No

बालबालिकाको "भाषा क्षमता" मूल्याङ्कनको लागि सहमति पत्र (अनलाइन संस्करण)

साल　　महिना　　तारिख

नाम _____

कृपया निम्न व्याख्या पढ्नुहोस् र तपाईं यसमा सहमत हुनुहुन्छ भने व्याख्याको अन्त्यमा "□ सहमत छु" मा चिन्ह लगाउनुहोस्।

1. उद्देश्यको सम्बन्धमा

(1) यस मूल्याङ्कनको उद्देश्य बच्चाले आफूसँग भएका सबै शब्दहरू प्रयोग गरेर “के गर्न सक्छ” भनेर अनलाइन संवाद मार्फत चौतर्फी र बहुपक्षीय दृष्टिकोणबाट बुझ्नु हो।

(2) साथै प्राप्त जानकारीहरूलाई त्यसपछि सिकाइमा मार्गदर्शन र सहयोग गर्न प्रयोग गर्ने उद्देश्य राखेका छौँ।

2. मूल्याङ्कनको विषयवस्तुको सम्बन्धमा

(1) DLA (Dialogic Language Assessment for Culturally and Linguistically Diverse Children) भनिने मूल्याङ्कन गरिनेछ।

(2) मूल्याङ्कनहरू व्यावसायिक रूपमा प्रशिक्षित जापानी भाषाका व्यवसायिक प्रशिक्षकहरूद्वारा गरिन्छन्।

(3) मूल्याङ्कन अनलाइन मार्फत बच्चा र मूल्याङ्कनकर्ता बीच एक्ला एक्लै गरिन्छ।

(4) मूल्याङ्कनको विषयवस्तुमा परिचयात्मक कुराकानी (लगभग 5 मिनेट), शब्दावली क्षमता (लगभग 5 मिनेट), बोल्ने र सुन्ने सीप (लगभग 8 मिनेट) र पढ्ने क्षमता (लगभग 25 मिनेट) गरि जम्मा 45 देखि 50 मिनेटको हुनेछ।

3. गोपनीयताको सम्बन्धमा

(1) हामीले गोपनीयतालाई गम्भीरतापूर्वक लिने भएकोले मूल्याङ्कनबाट तपाईंलाई कुनै हानि हुनेछैन।

(2) मूल्याङ्कनको नतिजा मूल्याङ्कनकर्ता र बच्चाले पढ्ने विद्यालयमा बाहेक अन्य कसैलाई सार्वजनिक गरिनेछैन।

4. मूल्याङ्कन नतिजाहरूको रिपोर्टिङको सम्बन्धमा

(1) मूल्याङ्कनको नतिजा लगभग एउटा A4 आकारको पृष्ठमा "मूल्याङ्कन रिपोर्ट" मा संक्षेप गरेर तपाईंलाई हस्तान्तरण गरिनेछ।

मूल्याङ्कनको उद्देश्य, विषयवस्तु र व्यक्तिगत जानकारीको व्यवस्थापनबारे बुझेपछि के तपाईं माथिको मूल्याङ्कनमा सहमत हुनुहुन्छ? (कृपया कुनै एकमा चिन्ह लगाउनुहोस्)

□ सहमत छु
□ सहमत

同意書多言語版（ロシア語）

Согласие на проведение оценки языковых способностей ребенка (онлайн-версия)

год　　месяц　　день

Ваше имя _____

◆ Пожалуйста, прочитайте следующее объяснение и в случае согласия отметьте галочкой «□ Да» в конце документа.

1. Цель

(1) Целью данной оценки является понимание того, что ребенок может делать, используя все слова, которые он знает. Оценка будет проводиться посредством онлайн-диалога на основе многогранного, всестороннего подхода.
(2) Полученная информация будет затем использована для обеспечения руководства и поддержки ребенка в ходе обучения.

2. Содержание оценки

(1) Оценка, которая будет проводиться, называется DLA (Dialogic Language Assessment for Culturally and Linguistically Diverse Children).
(2) Ее осуществляют профессиональные преподаватели японского языка, прошедшие специальную подготовку.
(3) Оценка будет проходить в режиме онлайн, и преподаватель будет общаться с ребенком один на один.
(4) Оценка займет около 45–50 мин. и будет состоять из следующих частей: вступительная беседа (около 5 мин.), словарный запас (около 5 мин.), навыки говорения и аудирования (около 8 мин.) и навыки чтения (около 25 мин.).

3. Конфиденциальность

(1) Мы очень серьезно относимся к соблюдению конфиденциальности, поэтому прохождение оценки не повлечет для Вас никаких неблагоприятных последствий.
(2) Результаты оценки не будут известны никому, кроме преподавателя, проводящего оценку, и сотрудников школы, в которой учится ребенок.

4. Сообщение результатов оценки

(1) Результаты оценки будут переданы Вам в виде письменного отчета объемом примерно в одну страницу формата A4.

Согласны ли Вы на проведение вышеуказанной оценки, поняв ее цели, содержание и принципы соблюдения конфиденциальности? (Пожалуйста, отметьте галочкой один из следующих ответов.)

☐ Да
☐ Нет

（3）準拠資料

文部科学省、2025、『文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための対話型アセスメント DLA』

文部科学省、2025、『文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための「ことばの発達と習得のものさし」実践ガイド』

文部科学省、2025、『文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための「ことばの発達と習得のものさし」パッとわかるまるわかりガイド』

URL　https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm

謝　辞

オンライン・アセスメント マニュアルの開発にあたっては、多くの多文化多言語の子どもたち、そして子どもたちを見守る保護者や先生方に協力をしていただきました。改めて心より感謝申し上げます。

多文化多言語で生きる子どもたちが、その持てる力を発揮し、豊かに学ぶことができるような学校や社会の実現に向けて、このマニュアルが少しでも役立てば幸いです。

オンライン・アセスメント マニュアル開発者一同

執筆者	弘前大学大学院教育学研究科教授	吉田　美穂
	弘前大学教育学部助教	松本　恵美

文部科学省委託事業「児童生徒の実態把握のためのネットワーク構築に向けた研究」

研究協議会委員（令和５～６年度）　※単年度の委員については委員を務めた年度を付記、所属・職名は当時

研究部会

弘前大学大学院教育学研究科・教授	吉田　美穂
弘前大学大学院教育学研究科・准教授	村元　　治
弘前大学教育学部・助教	松本　恵美
弘前大学教育推進機構・非常勤講師／ひろだい多文化リソースルーム・事務局長	笹森　圭子
青森大学総合経営学部・准教授	石塚ゆかり
青森中央学院大学経営法学部・准教授	田中真寿美
宮崎国際大学国際教養学部・准教授	早瀬　郁子
山形大学学士課程基盤教育院・教授	内海由美子
東京外国語大学多言語多文化共生センター・センター長／准教授	小島　祥美
NPO 法人みちのく国際日本語教育センター・副理事長	明日山幸子
認定 NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ・理事長	武　　一美
弘前大学大学院教育学研究科・准教授	桐村　豪文（令和５年度）
上越教育大学大学院学校教育研究科・准教授	原　　瑞穂（令和５年度）

研究拠点校部会

青森市立合浦小学校・教頭	中村　徳郎（令和５年度）
青森市立戸山西小学校・教頭	荒谷　俊治（令和５年度）
青森市立筒井南小学校・教頭	柳谷　　修（令和５年度）
青森市立幸畑小学校・教頭	工藤　寛之（令和５年度）
青森市立南中学校・学年主任	小笠原さつき（令和５年度）
青森市立佃中学校・学年主任	安部　慎也（令和５年度）
五所川原市立三輪小学校・教頭	野上　新二（令和５年度）
五所川原市立三輪小学校・教頭	藤田　和大（令和６年度）
平川市立金田小学校・教頭	木村　　卓（令和５年度）
三沢市立木崎野小学校・教頭	山形　貴雄（令和５年度）
三沢市立第一中学校・学年副主任及び研修主任	山本　隼人
むつ市立苫生小学校・教務主任	早坂　真悦（令和５年度）
東北町立東北小学校・教頭	常田　幸宣（令和６年度）
平内町立平内中学校・教務主任	内藤　祥之（令和６年度）

ネットワーク構築部会

青森県教育庁学校教育課小中学校指導グループ・指導主事	加藤　匡顕
青森県教育庁学校教育課高等学校指導グループ・指導主事	小角　大樹
青森県教育委員会東青教育事務所・指導主事	佐々木紀人
青森県教育委員会東青教育事務所・指導主事	松本　麻里（令和６年度）
青森県教育委員会西北教育事務所・指導主事	原　　倫子
青森県教育委員会中南教育事務所・指導主事	葛西　昭吾
青森県教育委員会上北教育事務所・指導主事	相馬　葉子
青森県教育委員会下北教育事務所・主任指導主事	長内　人志（令和５年度）
青森県教育委員会下北教育事務所・指導主事	米沢　真輝（令和６年度）
青森県教育委員会三八教育事務所・指導主事	吉成　京子
青森市教育委員会指導課・指導主事	鹿内　裕一
八戸市教育委員会学校教育課・主任指導主事	戸耒　友拓
弘前市教育委員会教育センター・指導主事	山本　琢也
五所川原市教育委員会学校教育課・指導主事	木村　千穂
平川市教育委員会指導課・指導主事	坂本　寛実
三沢市教育委員会学校教育課・指導主事	秋田久美子
むつ市教育委員会学校教育課・指導主事	細越　周作
青森県観光国際交流機構・国際交流グループマネージャー	藤本　　徹（令和５年度）
青森県観光国際交流機構・国際交流グループマネージャー	葛西　暁史（令和６年度）

文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための対話型アセスメントDLA

多文化多言語の子どもの「ことばの力」をはかる
オンライン・アセスメント マニュアル

著　者　　吉田　美穂　　松本　恵美

開発者　　弘前大学教育学部　文部科学省委託事業
「児童生徒の実態把握のためのネットワーク構築に向けた調査研究」
研究協議会研究部会
〒036-8560　青森県弘前市文京町１番地
TEL 0172-39-3313　FAX 0172-32-1478
https://www.edu.hirosaki-u.ac.jp/mext-outsourcing.html

発行日　　令和７年４月

発行者　　文部科学省総合教育政策局国際教育課

印刷所　　やまと印刷株式会社

本マニュアルは、 文部科学省の教育政策推進事業委託費による業務委託として、弘前大学が実施した令和６年度「児童生徒の実態把握のためのネットワーク構築に向けた研究」の成果物です。
したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。